

第3章 支援情報としての筑波大生の運動生活調査

第1節 健康・体力に対する意識と運動能力

本節は、さまざまな運動生活や運動行動を示す学生達の主体的条件として、彼等の健康や体力の実態を明らかにしようとするものであり、昭和56年度に実施した運動生活に関する調査および体力・運動能力の測定結果を基に学生の健康・体力に対する意識と体力・運動能力の実態を把握するとともに、両者を比較することによりどのような関連性があるかについて検討した。

§1 健康・体力に対する意識

1. 健康の自己評価と健康・体力に対する関心度

健康の自己評価については、健康であると答えた者は35%、普通と答えた者は52%、あまり健康でないと答えた者は12.8%であった(図26)。このことから、相対的にみて健康に自信を持っている者が少ないということが示唆される。

健康の自己評価と健康・体力に対する関心度については図27に示した。健康観と健康・体力への関心度との関連性について、健康の自己評価の結果から、次の3群に分けて把握を試みた。

H群：健康である (Healthy, n = 442)

N群：普通 (Normal, n = 664)

N・H群：あまり健康でない (Not healthy, n = 162)

H群では、健康・体力に常に注意を払っていると答えた者は34.9% (144人)、時々注意を払っていると答えた者は53.8% (238人)、あまり注意を払っていないと答えた者が13.6% (60人)であった。

N群では、健康・体力に常に注意を払っていると答えた者が15.7% (104人)、時々注意を払っていると答えた者は69.7% (463人)、あまり注意を払っていないと答えた者は14.6% (97人)であった。

N・H群では、健康・体力に常に注意を払っていると答えた者は22.2% (36人)、時々注意を払っていると答えた者は54.9% (89人)、あまり注意を払っていないと答えた者は22.8% (37人)であった。

健康・体力への関心度について3群間に顕著な差異は認められないが、健康であると答えたH群は他のN群およびN・H群と比較すると、わずかではあるが健康・体力に対する関心度が高い傾向が認められる。

2. 健康の自己評価と体力の自己評価

図26に示すように、体力に自信があると答えた者は14%にすぎず、現代の半健康・運動不足の世相を反映しているともいえる。

健康と体力は表裏一体の関係にあり、両者を分けて論議することは不適當であるため、健康および体力に対する意識との関連性について、(1)で分類したH群、N群、NH群の3群に分けて群別に検討した。

各群別の体力に対する意識については図28に示した。図から、健康に対する意識が高いほど体力に対する意識も高いという傾向が認められた。即ち、健康に対する意識が高いと思われるH群と健康に対する意識が低いと思われるNH群とを比較すると、H群の25.8%が体力に自信があると答え、NH群のそれはわずかに4.3%にすぎなかった。言い換えると、体力に自信があると答えた172人中114人(66.3%)がH群に属し、NH群に属するそれは7人(4.1%)だけであり、明らかに健康に対する意識が体力に対する自信の程度に影響を与えているものと思われる。

前述したように、健康と体力は表裏一体であり、切り離して考えられない因子である。体力は健康を土台にして成立するものであり「健康であること」が体力の必要最低条件であることを考え合わせると、上記の所見は当然の結果であろう。

体力は大きく分けると精神的要素(mental factor)と身体的要素(physical factor)に分類され、後者は行動体力(fitness for performance)と防衛体力(fitness for protection)に分けられ、さらに両者は多くの因子によって構成されることは周知のことである。従って、自分の体力をどの体力構成因子によって判断するかによって、体力の自信の程度も意味が異なることが推測される。そこで体力水準の判断基準をどの体力構成因子にしているかを検討した。

図29、30に各体力構成因子に対する自己評価について示した。

体力に自信があると答えた群において第1位に行動体力に自信があると答えた者が48.8%と最も多く、また第2、3位においても行動体力に自信があると答えた者はそれぞれ47.7%、58.5%を示し、半数以上の者が行動体力に自信があるということが理解できる。一方、体力に対して普通およびあまり自信がないと答えた群においては第1位に防衛体力をあげている者が最も多く、それぞれ42.1%、49.8%を占めている(図29)。さらに、体力の各因子別に検討してみると、体力に自信があると答えた群で第1位で多かったのが、運動への意欲(17.4%)、全身持久性(16.3%)、筋力(9.3%)、瞬発力(8.1%)であり、この体力構成因子は実際の運動場面で重要な因子である。

体力に対して普通および自信がないと答えた群において第1位で最も多かったのが環境適応力で、それぞれ16.7%、19.2%を占めており、上位に行動体力をあげていないのが特徴である。

3. 健康・体力に対する意識と運動生活

ここでは、健康・体力に対する意識が実際の運動生活にどのように反映されているかについて検討を試みた。

図31に示すように、健康・体力に対する意識が高い群ほど運動クラブ（Club所属階層）あるいは運動プログラムに参加している者（Program参加階層）の割合が多く、逆に健康・体力に対する意識が低い群ほどほとんど運動を行っていない割合が多くなる傾向にある。即ち、日常の運動生活と健康・体力に対する意識との関連性があり、運動クラブ等に所属することにより、高い水準の行動体力が要求され、健康・体力に対する意識も高まるものと思われる。同様に、日常生活のあり方によっても、必要とされる体力の水準は異なるであろうし、健康・体力に対する意識も当然異なるであろう。

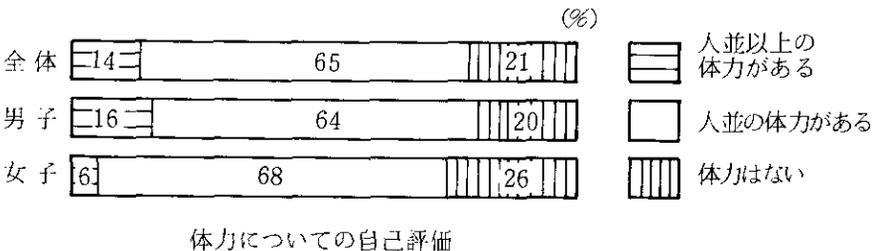
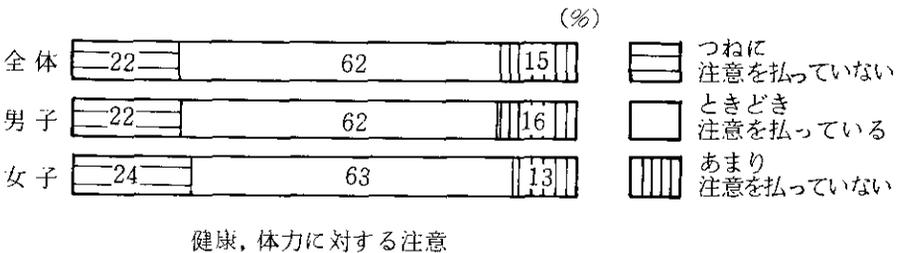
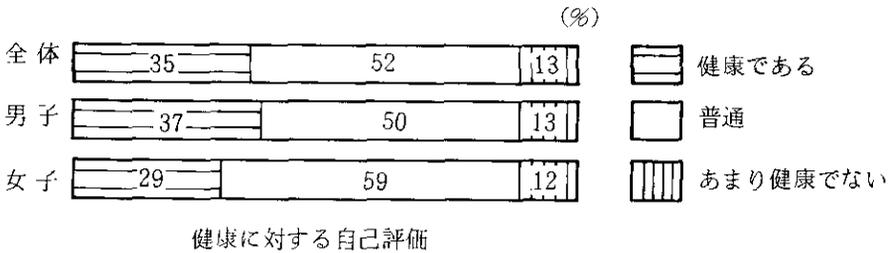


図26 健康・体力に対する意識

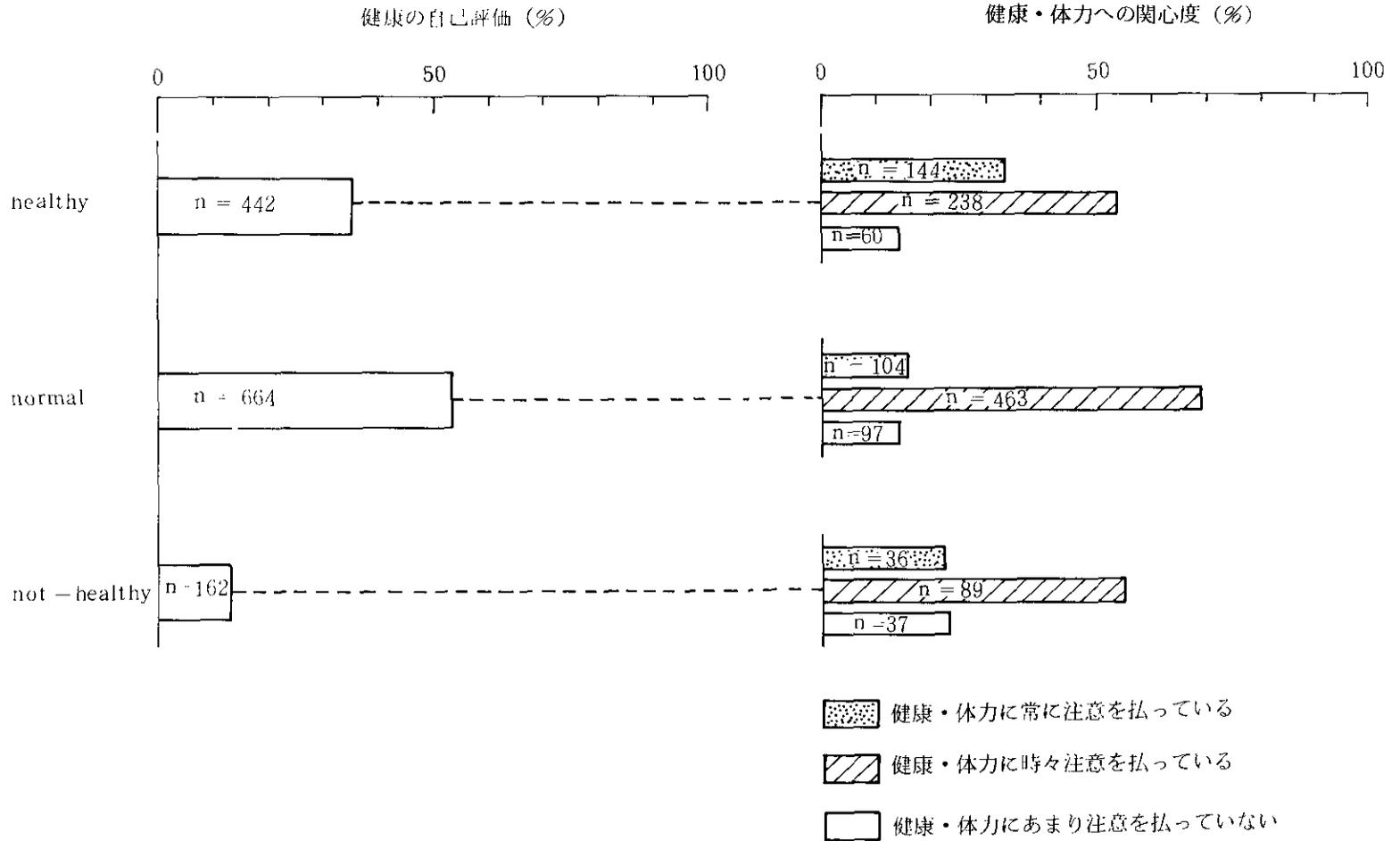


図 27 健康の自己評価と健康・体力に対する関心度の関連性

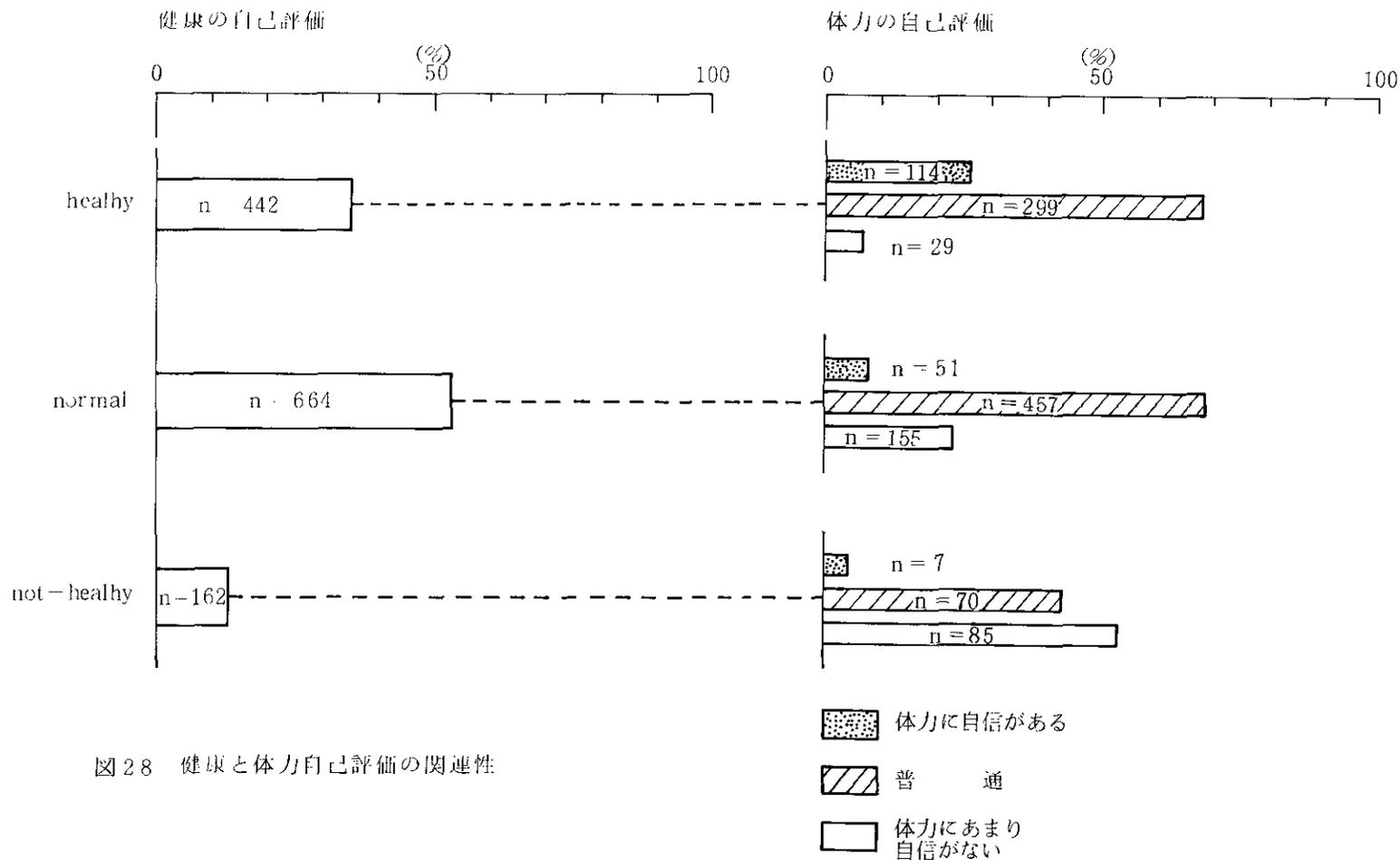


図 28 健康と体力自己評価の関連性

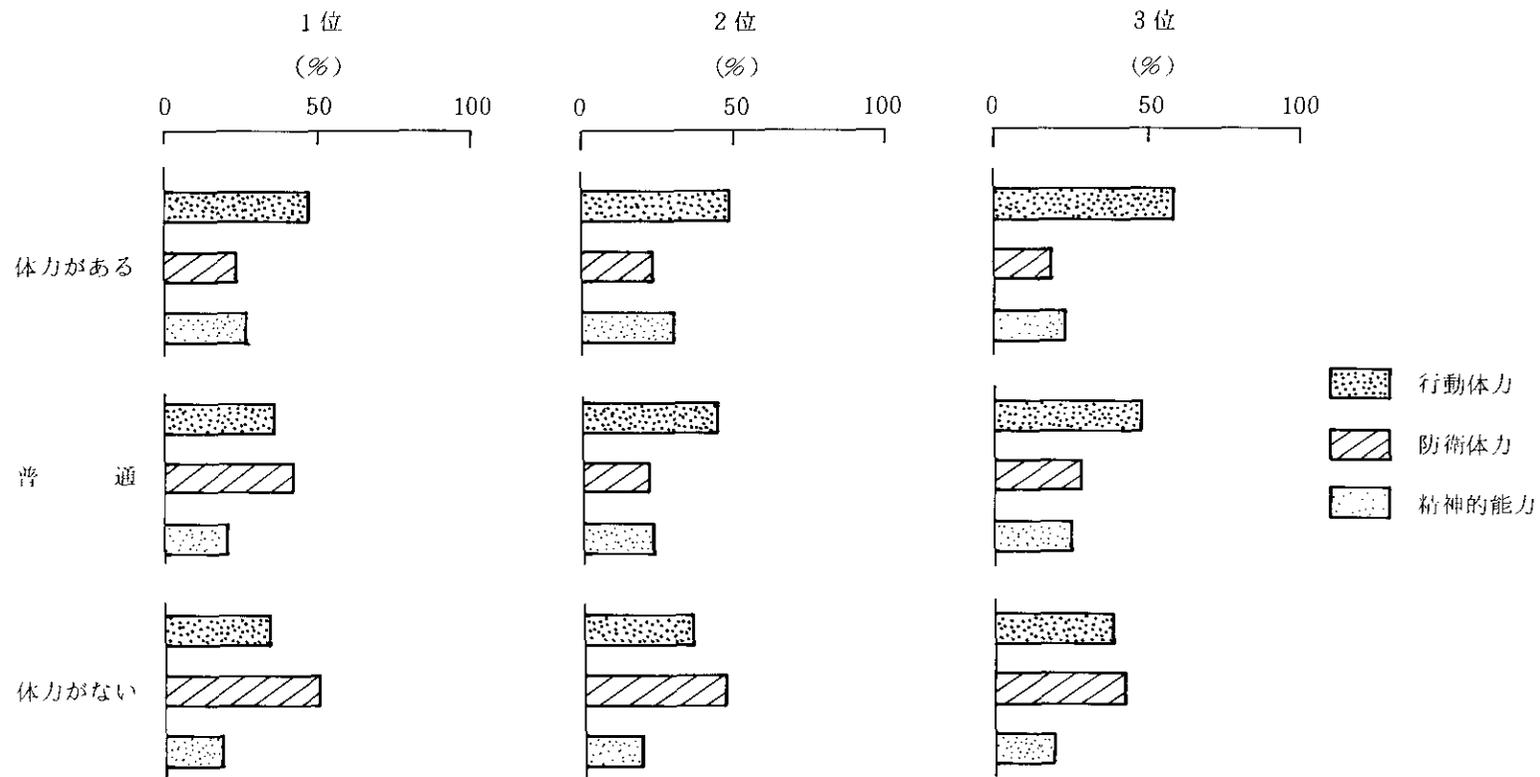


図 29 各体力構成因子に対する自己評価

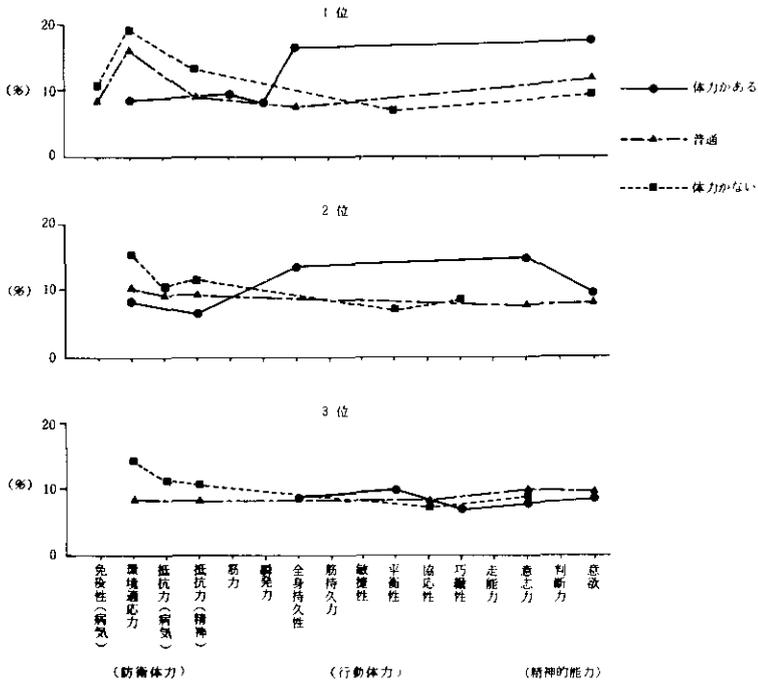


図30 体力構成因子に対する自己評価

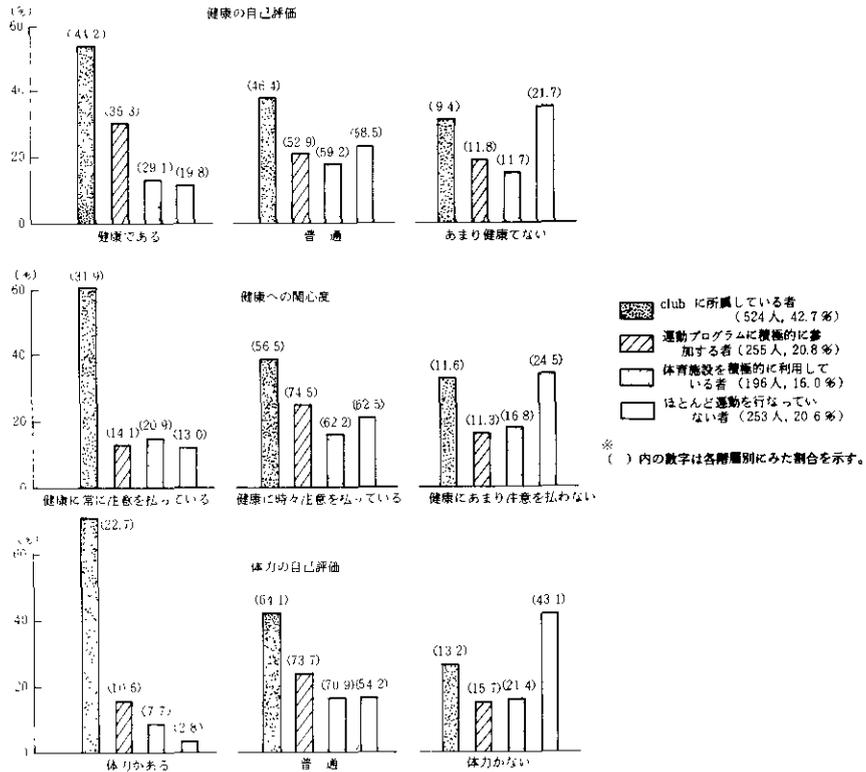


図31 健康・体力に対する意識と運動生活

§ 2 体力の自己評価の分類による筑波大学生の体力・運動能力の実態

毎年4月に全学的な規模で実施している体力・運動能力測定の結果について、今回は、前セッションの回答により1. 人並以上の体力があると回答した者の実態、2. 人並の体力があると回答した者の実態、3. 体力がないと回答した者の実態、の3群に分類して、調査対象者について、体力・運動能力の実態を把握し、3群間で比較を行なった。

比較項目として、体力・運動能力測定の種目を形態的な側面と運動能力的な側面とに分類して、次の17種目とした。

形態的側面として、身長、体重、胸囲、上腕囲(右)、大腿囲(右)、皮下脂肪厚(上腕部)、皮下脂肪厚(背部)の7種目である。

運動能力的側面として、肺活量、背筋力、立位体前屈、垂直跳び、上体おこし、サイドステップ、50M走、立幅跳び、ハンドボール投げ、12分間走の10種目である。

図32は体力の自己評価の分類により、形態的な比較を行なっている。

男子は、1. 人並以上の体力があると回答した者は、2. 3を選択した者と比較して、体重、胸囲、上腕囲、大腿囲は大きく、皮脂厚は、上腕部、背部ともに小さい。逆に、3. と回答した者は、上腕囲、大腿囲は他と比較して小さいが、皮脂厚は全体平均より大きくなっている。

以上のように、男子においては、体格が大きく、皮脂厚の少ない「しまった身体」の者が、人並以上の体力があるという意識を有していることがうかがえる。

女子は、身長が高く、皮脂厚の小さい者が1. と回答する傾向があり、逆に、男子同様、3. と回答した者は、皮脂厚が大きい傾向にあった。

このように、形態的側面からは、体力の自己評価をする場合の基準として皮脂厚の大小ということが特徴的であり、今後の指導の中で皮脂厚対策ということが必要になると思われる。

図33は体力の自己評価の分類により運動能力を比較している。

10種目すべてが男女とも同様の傾向を示し、1. と回答した者は、すべての種目で、2 3 と回答した者よりよい成績を示し、さらに全体平均をも上まわっており、意識と実態とが一致している。

また、3. と回答した者は、特に、筋力、瞬発力、持久力が劣る傾向があり、自己評価の基準として上記の3特性があげられよう。

以上のように、意識と実態は一致する傾向がみられ、かなり正確に自己評価しているといえる。

今後の課題としては、3. と回答した者への指導と能力の向上、そして、健康・体力への意識や実態の全体的レベルアップを図らねばならない。

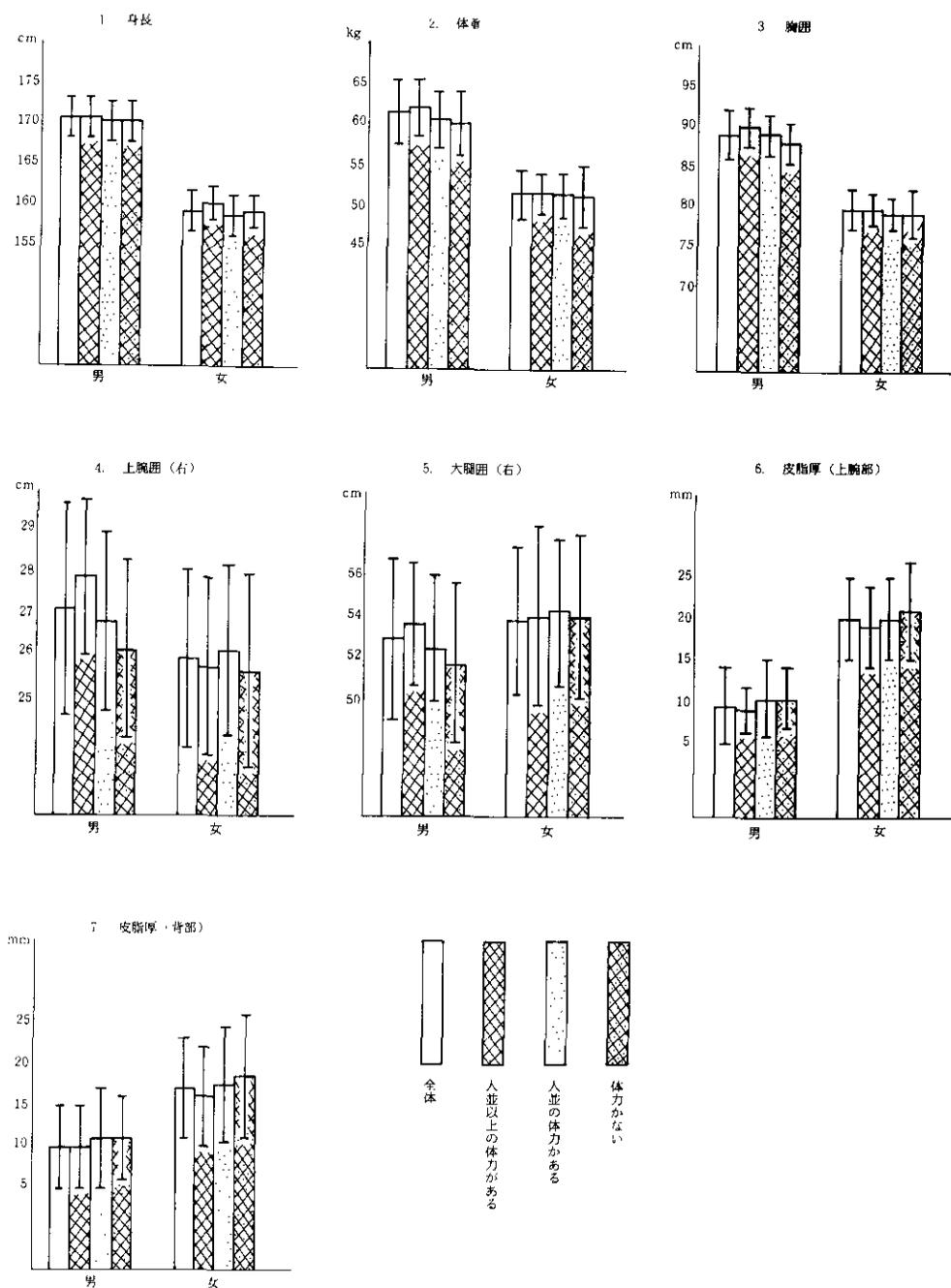
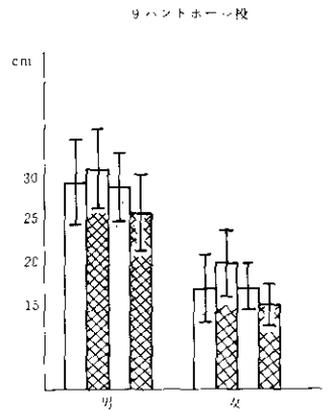
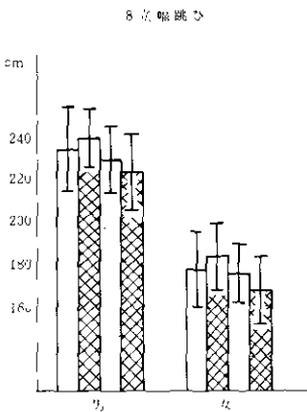
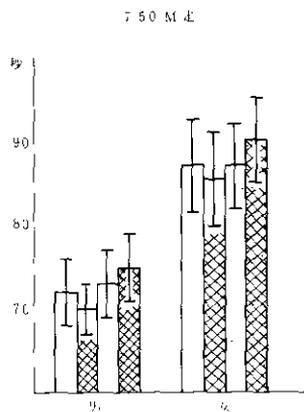
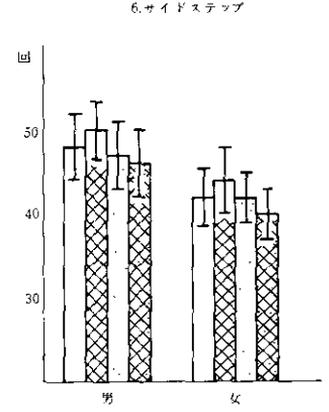
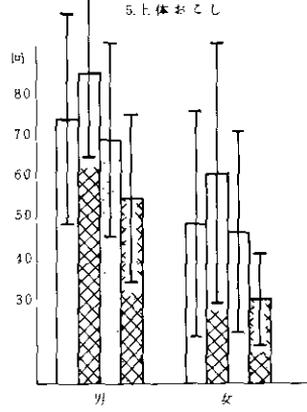
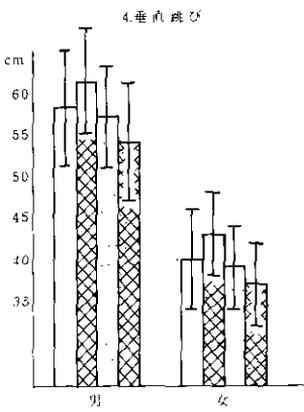
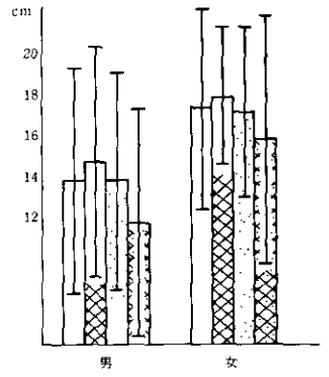
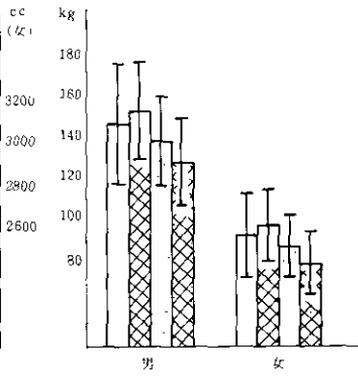
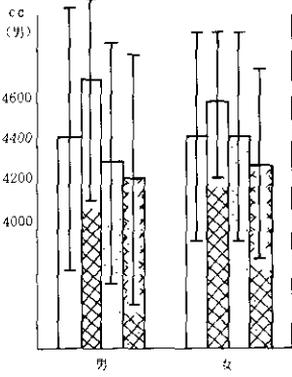


図32 体力の自己評価による形態的比較

1. 肺活量

2. 背筋力

3. 立位体前屈



10 12分完走

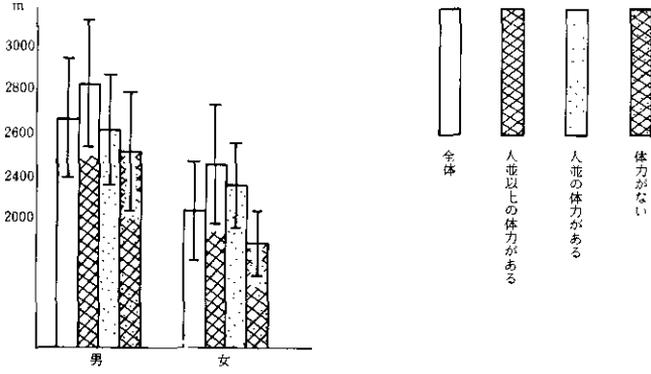


図 33 体力の自己評価による運動能力の比較

第2節 運動生活の類型と階層的把握

第3章は筑波大学生の運動生活の現状を明らかにしようとするものである。筑波大学では正課体育のプログラムを含むさまざまな体育事業（第1章、図2参照）が、スポーツの生活化を指向して進められてきている。これらの体育事業の効果や影響は学生の運動生活に何らかの形で反映しているであろうから、学生達の運動生活の現状を知ることによって、これまでの正課体育や体育事業のあり方を見直すための、また今後の改善のための有効な資料が得られると考えたのである。

学生達の運動生活は、個人の持つ主体的条件と、その個人をとりまく環境的条件との関連においてそのあり方が決まることになるであろうから、ここでは大学における体育事業との関連において彼等の運動生活の様子を把握することにした。

第2節は筑波大学生の運動生活の全体的傾向を類型的・階層的に把握すると同時に、その経年的な変容をみることで、さらに主体的条件からみた各階層の特徴をとらえようとするものである。本節での階層的把握を踏まえて、第3節の§1から§4において、それぞれの階層別の運動生活について詳細に報告することにした。

§1 運動生活の類型と階層

(1) 運動生活の類型

運動生活の様子を類型化あるいは階層化してとらえる方法はさまざまであり、日本人のスポーツ人口調査にみられるようにスペクテーター層をも含めて分類する⁽¹⁾とらえ方もあるが、ここでは筑波大学生を対象としているので大学を中心とした体育事業との関連でとらえることにした。筑波大学生の運動をめぐる生活は、彼等の住居が大学に隣接している条件からその大部分が大学の体育施設や関係の運動施設でなされること、すなわち彼等の運動生活はそのほとんどが大学における体育事業との関わりで成立するとみなされるからである。

そこで、運動生活の類型のとらえ方は表1-2に示したような宇土の体育事業との関係から分類する8類型に依拠することとした。⁽²⁾

したがって、調査にあたっては表1-3に示したような質問項目を設定して運動生活の類型的な把握を行った。

調査の結果は表1-4のとおりであった

表12 運動生活の類型 (宇土⁽²⁾ 1970)

運動生活の類型 体育・スポーツ事業	1 (C)	2 (C・P)	3 (C・A)	4 (C・P・A)	5 (P)	6 (P・A)	7 (A)	8 (S)
クラブ・サービス (C.S.)	◎	○	○	○	/	/	/	/
プログラム・サー ビス (P.S.)	/	○	/	○	◎	○	/	/
エリア・サー ビス (A.S.)	/	/	○	○	/	○	◎	/

◎は運動生活の基本的類型

① C→クラブ運動者としての運動生活

② C・P→クラブ運動者であると同時にプログラム運動者としての運動生活

③ C・A→クラブ運動者であると同時にエリア運動者としての運動生活

④ C・P・A→クラブ運動者・プログラム運動者・エリア運動者の三つが重複した運動生活

⑤ P→プログラム運動者としての運動生活

⑥ P・A→プログラム運動者とエリア運動者の二つが重複した運動生活

⑦ A→エリア運動者としての運動生活

⑧ S→いずれの体育・スポーツ事業にもかかわりのない潜在的な運動者

(「宇土正彦, 体育管理学, 現代保健体育学大系5, 大修館書店1970」による)

表13 運動生活の種類と階層的把握のために用いた質問とその内容

Q7 筑波大学での生活活動全体の中で、現在あなたは「意図的な運動」をどのように行っていますか。正課体育の授業で運動することを除いて、次の4つのうち自分にあてはまるものを選び、右の解答欄の該当するところへ○印を、該当しないところは×印をつけて下さい。

- A 体育系の課外活動団体（運動部，同好会）に所属して運動している。
- B スポーツデーやスポーツ教室などの体育的なプログラムに参加して運動している。
- C 自由時間に運動の施設や用具を利用して、自由なやり方で運動を楽しんでいる。
- D 現在は、正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない。

A	
B	
C	
D	

○印・×印を記入する

Q8 上記のQ7に対するあなたの解答結果は、次の1から8の種類のどれに該当するかをコラムに記入して下さい。

類 型	1	2	3	4	5	6	7	8
A	○	○	○	○	×	×	×	×
B	×	○	×	○	○	○	×	×
C	×	×	○	○	×	○	○	×
D	×	×	×	×	×	×	×	○

番号で答える

⑤

表14 筑波大学生の運動生活の類型別の割合

運動生活の類型	1	2	3	4	5	6	7	8	計
体育系の課外活動団体に所属して運動している	○	○	○	○	×	×	×	×	(1, 2, 3, 4) 42 (%)
スポーツデーやスポーツ教室などの体育的プログラムに参加して運動している	×	○	×	○	○	○	×	×	(2, 4, 5, 6) 46 (%)
自由時間に運動の施設や用具を利用して、自由なやり方で運動を楽しんでいる	×	×	○	○	×	○	○	×	(3, 4, 6, 7) 51 (%)
現在は正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない	×	×	×	×	×	×	×	○	(8) 21 (%)
全体 (%)	8	12	8	14	7	13	16	21	
男 (%)	8	12	9	15	7	15	15	18	
女 (%)	12	9	6	11	9	8	18	29	

個人の運動生活は、三種類の体育事業に対応する三つの基本的類型（表12㊸参照）がそのままあてはまる者もあれば、二つまたは三つの基本的類型を組み合わせることによってとらえられる者があり、これを整理して得られたのが8類型である。

筑波大学生の8類型の分布を割合（％）で示したのが表14の下段の数字である。

クラブに所属し、プログラムにも参加し、自由時にエリヤを利用して運動することをも実施している者（類型4）は全体の14％（男子15％、女子11％）であるが、類型8のように正課体育の授業以外には意図的な運動をしない者が全体の21％（男子18％、女子29％）もあることが明らかになった。また、自由時にエリヤを利用して自由なやり方で運動している者（クラブ、プログラムへは対応していない。類型7）が全体の16％とかなり多いことも注目される。

それぞれの体育事業との関連から実態をとらえると、表14の右端のような割合が示された。

クラブ所属者は全体で42％、スポーツデーなどのプログラムに参加する者は46％、自由時に自由なやり方でエリヤを利用している者は全体の51％、正課体育以外には運動しない者（類型8と同じ）は21％、であった。

そこで、これらの8類型をもとにして運動生活を階層的に把握することを検討した。

(2) 運動生活の階層的なとらえ方

運動生活を階層的にとらえる意義は、運動欲求の強さや運動実践の実質性からみて、望ましい

階層からランクづけをすることにある。したがって、運動生活の状況をどのようにとらえるかによってとらえ方は違ってくることになる。宇土は運動生活を階層的にとらえる基礎として「継続性」「組織性」「合理性」をあげており、二つの階層的なとらえ方（A案，B案）を示している。

どちらも4階層としてとらえるものであり、両案ともに第1階層は類型1～4にもとづくClub所属階層となり、第4階層は類型8にあたるStay階層となる。2案の違いはProgram参加階層とArea利用階層のどちらを望ましい階層とみるかにあるといえる。

そこで、筑波大学における現状を考えると、学生を対象としたプログラムは単発的なスポーツデー（年2回）に限定されており、その実質はyearly型とみられる。一方エリア利用は比較的恵まれた施設と空間の条件を背景として実質的な活動が展開されており、「継続性」という基礎条件からみて運動生活がすぐれているとみなすことができよう。

したがって、今回は第1階層はClub所属階層（類型1，2，3，4），第2階層はArea利用階層（類型6，7），第3階層はProgram参加階層（類型5），第4階層はStay階層（類型8）という4階層のとらえ方（宇土のB案）を採用することにした。

その結果は次のようになった。

第1階層（Club所属階層）	42%
	（男子44%，女子38%）
第2階層（Area利用階層）	29%
	（男子30%，女子26%）
第3階層（Program参加階層）	7%
	（男子7%，女子9%）
第4階層（Stay階層）	21%
	（男子18%，女子29%）

運動生活がもっとも積極的であるとみられる第1階層と、反対にもっとも消極的で運動することから逃避しているともみられる第4階層が予想以上に多いことが注目された。詳細にわたる考察は第3節にゆずるが、まず第1階層の実質は同好会所属が多くを占めており、daily，weeklyに継続してクラブで活動している者の割合はさらに減少するとみられる。女子のクラブ所属の割合は男子より少ないことがわかった。男子では5～6人に1人が、女子では3～4人に1人が、正課体育の授業以外にはなにも運動をしていない第4階層（Stay階層）であることが明らかになり、今後この階層への働きかけの必要性が示唆された。

§2 運動生活階層の経年的変容

表15は運動生活の8類型が学年別にどのように違うのかを示している。さらに表15の結果から運動生活の階層分布の経年的変化をみたのか表16である。

表15 学年・性別にみた運動生活類型(%)

性	類型 学年	1	2	3	4	5	6	7	8	計
		男	2年	7.9	20.3	3.9	18.2	9.7	14.5	8.5
3年	8.3		12.3	9.0	16.7	6.0	13.7	15.0	19.0	100
4年	6.8		4.1	14.6	11.6	4.8	16.7	23.1	18.4	100
女	2年	10.4	13.9	5.2	16.5	7.0	9.6	6.1	31.3	100
	3年	8.8	7.2	7.2	7.2	13.6	9.6	17.6	28.8	100
	4年	2.7	3.6	7.3	7.3	0	3.6	3.6	21.8	100

表16 運動生活の階層分布の経年的変化(%)

性	階層 学年	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	計
		男	2年	50.3	23.0	9.7
3年	46.3		28.7	6.0	19.0	100
4年	37.1		39.8	4.8	18.4	100
女	2年	46.0	15.7	7.0	31.3	100
	3年	30.4	27.2	13.6	28.8	100
	4年	30.9	47.2	0	21.8	100

- (注) 第1階層は Club 所属階層
 第2階層は Area 利用階層
 第3階層は Program 参加階層
 第4階層は Stay 階層

Club 所属階層と Program 参加階層は高学年になるにつれて減少するが、Area 利用階層は経年的に漸増しており、とくに女子では2年生の15.7%から4年生の47.2%と著しい増加を示した。

表 15 をみると類型 2 (Club 所属階層であると同時に Program 参加階層としての生活) と類型 4 (Club 所属, Area 利用, Program 参加が組み合わされた運動者) が学年を追って減少しているのに対して, 類型 3 (Club 所属と同時に Area 利用階層としての運動生活) が高学年になるにつれて顕著に増加している。これは表 16 に示された第 2 階層の増加と第 1 階層と第 3 階層の減少を説明している。

Stay 階層の割合はどの学年でも女子の方が高いが, 女子は学年が進むにつれて著しく減少することが示された。

こうした傾向は, 学業とも関係して時間的に拘束されるクラブ生活や競技的な運動生活から個人のレベルで運動を楽しむことへの転化とみられると同時に, 筑波大学の豊かな体育施設と広大な空間の中にある関係的運動施設が手軽に個人の運動生活(運動の場)を可能にする環境的要因を備えていることによるとみられる。Program 参加階層の経年的減少傾向と関連して, Program service のあり方の検討が必要となろう。

§ 3 運動生活の階層からみた主体的条件

§ 3 では, 運動生活の階層と主体的条件との関係のみようとするものである。

階層の違いは, それぞれの階層に属する学生の主体的条件の違いを想起させる。主体的条件, あるいは運動者としての個人の特徴をあらわすものとして, ここでは“生きがい充実感”, “健康の自己評価”, “健康・体力についての注意のほらい方”, “体力の自己評価”, “過去の運動体験や運動に対する積極性”を取りあげて考察を加えた。

表 17～表 21 および図 34 は, これらの項目と運動生活の階層との関係を示している。

表 17 生きがい 充実感と運動生活階層との関係(%)

事 項	階 層	第 1 階層	第 2 階層	第 3 階層	第 4 階層
非常に充実感がある		6.5	6.1	2.2	6.0
かなり充実感がある		37.7	40.6	38.2	29.0
どちらともいえない		23.1	22.8	22.5	26.6
少し充実感が欠如している		25.8	25.8	29.2	21.4
非常に充実感が欠如している		6.9	4.7	7.9	31.8
計		100	100	100	100

表 17 の生きがい 充実感との関係についてみると, Club 所属階層, Area 利用階層, Program 参加階層の間には特に顕著な傾向はみられない, しかし, Stay 階層では, 他の階層に比較して, 充実感の欠如を感じているものが多く, 特に「非常に充実感が欠如している」と回答し

たものが31.8%もみられた。

表18 健康についての自己評価を運動生活階層との関係(%)

事 項	階 層	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層
健康である		44.3	33.5	28.9	19.8
普通		46.4	54.8	53.9	58.5
あまり健康でない		9.4	11.6	12.2	21.7
計		100	100	100	100

表19 健康・体力についての注意の運動生活階層との関係(%)

事 項	階 層	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層
つねに注意をはらっている		31.9	18.6	11.1	13.0
ときどき注意をはらっている		56.5	68.1	73.3	62.5
あまり(全然)注意をはらっていない		11.6	13.3	15.6	24.5
計		100	100	100	100

表18の健康についての自己評価と運動階層との関係については、「健康である」と回答したものは、Club 所属階層、Area 利用階層、Program 参加階層、Stay 階層の順で高い比率を示し、「あまり健康でない」と回答したものは、その正反対の順位になっている。「健康感」が運動生活の階層と関連が深いことを意味していると考えられる。

健康・体力についての注意と運動生活階層との関係については表19のようであり、Club 所属階層の意識は高く、「つねに注意をはらっている」ものが他の階層と比較して30%強と高い比率になり、Stay 階層では健康・体力への無関心層が25%近く存在している。これも表18の健康についての自己評価と同様の傾向を呈している。

表20の体力についての自己評価と運動生活階層との関係については、「人並以上の体力がある」は、圧倒的にClub 所属階層に多く、「体力はない」と回答したものはStay 階層が最も多く、43.1%となっている。Club 所属階層では継続的に運動をしていると考えられるが、しかし「体力はない」と回答したものが13.2%もあり、名目的なClub 所属階層もいることをうかがわせている。また筑波大学においては、高学年になるにつれてArea 利用階層が漸増する傾向にあり、自主的で積極的な運動生活を期待させるものがあるが、体力についての自信のほどは、予想外に低く自己評価されており、Area 利用階層もClub 所属階層と同様にどのような方法でどのくらいの頻度で日常生活に運動を組み込んでいるかの分析を必要とされると考えられる。Stay 階層では、40%強の多くのものが「体力はない」としている現状をみると、Stay 階層

を対象とした体育事業の在り方、特に正課体育でのこれからの学生に対する指導を工夫し強化する必要性を痛感させられる。

表20 体力についての自己評価と運動生活階層との関係(%)

事 項	階 層	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層
人並以上の体力がある		22.7	9.7	7.8	2.8
人並の体力がある		64.1	71.5	76.7	54.2
体力はない		13.2	18.8	15.6	43.1
計		100	100	100	100

表21 過去の家庭環境と運動階層との関係(%)

事 項	階 層	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層
非常に積極的であった		11.0	8.1	3.4	3.2
やゝ積極的であった		20.7	18.7	13.5	11.5
普通であった		35.0	37.4	48.3	35.2
やゝ消極的であった		26.2	26.5	28.1	35.2
非常に消極的であった		7.1	9.2	6.7	15.0
計		100	100	100	100

表21は、家庭の運動に対する積極性について階層別に示したものである。

「非常に積極的であった」、「やゝ積極的であった」とするものが、Club所属階層やArea利用階層に多く見られ、「やゝ消極的であった」、「非常に消極的であった」とするものがStay階層に多く、50%もいる。運動に対する態度は家庭環境の影響を受けていることをうかがわせる。図34は幼年から高校時代までの運動経験のしかたと運動生活階層との関係を示している。全般的な傾向をみると、各階層とも中学校時代に最も運動に対して積極的だったことがみられ、高校時代になると消極的になる傾向がある。このような傾向の中で、Club所属階層のものは、高校時代にもかなり運動に対して積極的であったものが多い。Area利用階層やProgram参加階層では、高校時代には「非常に積極的であった」とするものが、中学校時代に比較して半分以上に減少することも注目しなければならない。Stay階層のものは、いつの時代にも運動に対して消極的であったとするものが多く、特に高校時代には「積極的であった」とするものが20%に満たず、その反面「消極的であった」とするものが60%強もいた。Stay階層の50%近くは小学校頃からすでに消極的であることが示された。

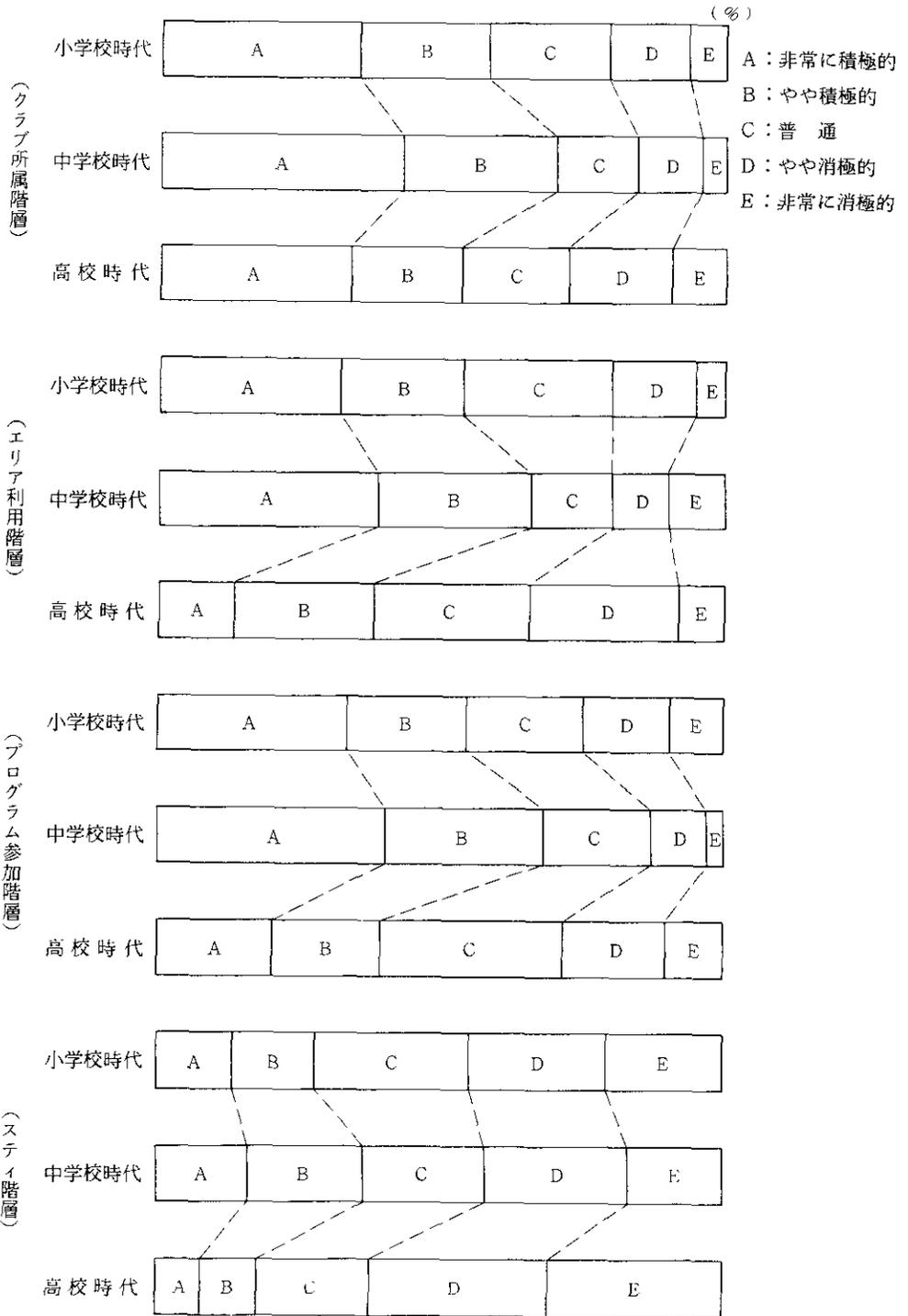


図 34 運動階層別に見た過去の運動体験

§ 4 ま と め

(1)筑波大学の運動生活の現状を類型化してとらえ、体育事業との関連から階層的に把握した結果、Club 所属階層4.2%、Area 利用階層2.9%、Program 参加階層7%、Stay階層2.1%であることが明らかにされた

(2)運動生活階層の分布が学年の進行につれてどう変化するかをみたところ、Club 所属階層及び Program 参加階層が減少し、Area 利用階層が漸増する傾向がみられた。女子では、Area 利用階層の増加と Stay 階層の減少が著しいことが明らかになった。

(3)運動生活の階層別に学生の主体的な条件（運動者としての特徴ともみられる）のいくつかについて考察したところ、Club 所属階層は健康や体力に自信を持ち、家族及び自分自身の過去の運動体験が積極的であるのに対して、Stay 階層ではさまざまな要因で消極的な傾向を持っていることが明確となった。とくに、いきがい充実感がやや欠如しており、健康・体力に自信がなく、さらに過去における家族や自己の運動体験が極めて消極的であった。全体の21%を占める Stay 階層に対する正課体育の授業やプログラムおよびエリヤサービスのあり方が今後の課題として提示されたことになる。

参 考 文 献

- 1) 日本体育協会：「日本人のスポーツ行動」 昭和49年
- 2) 宇土正彦：「体育管理学」 P 133 大修館書店 昭和45年
- 3) 同 上 P 139

第3節 階層別にみた運動生活の実態

§1 Club 所属階層の運動生活

第3節 §1 はClub 所属階層（対象者は体育専門学生を除いた一般学生のクラブ所属者）の運動生活の実態を明らかにするものである。具体的にその実態を調べるために以下の項目を中心に考察した。

1. Club 所属階層の団体別人数分布
2. 参加動機
3. 参加状況
4. 活動への要求（活動に対する満足度，活動に対して良かったと評価できたこと，活動に対して良くない，あるいは改めたいと思われる面）
5. Club 所属階層の健康・体力観
6. まとめ

1. Club 所属階層の団体別人数分布

学内の体育系課外活動団体（運動部・同好会）に所属している者は本調査の全体標本数の約40%（525名）である。各団体における所属人数は表22に示してある。

表22 種目団体別の人数分布表

Item	f	%	Item	f	%
1 アーチェリークラブ	17	3	15 サッカー同好会	16	3
2 アメリカンフットボール	7	1	16 山岳部	7	1
3 アイススケート部	6	1	17 自然探検部	3	1
4 ウェイトトレーニングクラブ	10	2	18 蹴球部	1	0
5 オリエンテーリング愛好会	14	3	19 柔道部	1	0
6 空手部	4	1	20 準硬式野球部	10	2
7 弓道部	4	1	21 水泳同好会	9	2
8 草野球同好会	4	1	22 水泳部	2	0
9 剣道同好会	12	2	23 スキー同好会	10	2
10 剣道部	1	0	24 スキー部	6	1
11 硬式庭球部	10	2	25 正道術部	1	0
12 硬式野球部	1	0	26 創作ダンス部	3	1
13 ゴルフ部	5	1	27 漕艇部	4	1
14 サイクリングクラブ	10	2	28 ソフトボール同好会	8	2

Item	f	%	Item	f	%
29 卓球同好会	16	3	42 ヨット部	10	2
30 卓球部	14	3	43 ライフル射撃部	7	1
31 艇友会	8	2	44 ラグビー部	10	2
32 テニス同好会	17	3	45 陸上競技部	2	0
33 軟式庭球部	14	3	46 陸上ホッケー部	8	2
34 バスケットボール同好会	15	3	47 ワンダーフォーゲル部	10	2
35 バドミントン同好会	30	6	48 アイスホッケー部	7	1
36 バドミントン部	13	3	49 鹿島神流武道部	9	2
37 バレーボール同好会	12	2	50 合気道同好会	13	3
38 バレーボール部	1	0	51 軟式野球同好会	8	2
39 ハンドボール同好会	10	2	52 その他	76	15
40 マリンダイビングクラブ	11	2			
41 山とスキーの会	4	1	Total	511	100

表 22 より、所属団体数は 51 (ただし、“その他”に属する団体数は不明) である。所属人数別に見ると、多い団体名はバドミントン同好会、サッカー同好会、卓球同好会、バスケットボール同好会で各々全体の 3~6% である。また同好会に所属する者は全体の約 40% を占めている。これらの結果は大学体育研究第 1 号 (1979) で報告された「将来やりたい種目」として一般学生 (体育専門学生を除く) に人気のあったテニス、卓球、バドミントン、バレーボール、水泳等の種目とはほぼ一致している。このことは一般学生の希望する種目と、Club 階層の所属する種目に共通点があるということである。即ち、Club 階層においても一般学生同様に比較的手軽にしかも楽にできる種目、小人数でゲームを楽しめる運動が選択される傾向にある。

2. 参加動機

Club 所属階層の参加動機を示した結果は 表 23、表 24、表 25 に示してある。

表 23 より、家族が運動やスポーツに対して積極的であるかという質問に対して、“普通である”から“非常に積極的である”と答えた者は全体の 67% を占めている。「幼児から小学校」、「中学校」、「高校」の各々の時代にスポーツを体験したことのある者は各々「幼児から小学校」79%、「中学校」84%、「高校」73% である。この結果から、Club 所属階層は大学までに運動・スポーツの体験を持っている者が大多数を占めていることがわかる。また、家庭においても Club 所属階層は積極的に運動・スポーツができる環境にあったと推察される。

表 24 は現在の Club に入る動機を示したものである。参加動機の 1 位は“体を動かしたい” 20%、以下“他人からすすめられて” 10%、“クラブに魅せられて” 10%、“自分を試してみた

表23 スポーツの過去の体験

判定項目	A*		B*		C*		D*	
	f	%	f	%	f	%	f	%
① 非常に積極的であった	58	11	185	35	227	43	178	34
② やや積極的であった	108	21	120	23	142	27	108	20
③ 普通であった	183	35	112	21	75	14	99	19
④ やや消極的であった	137	26	75	14	60	11	96	18
⑤ 非常に消極的であった	37	7	31	6	19	4	46	9

*A あなたの家族は、一般的にいて運動やスポーツに対して積極的でしたか？

*B 幼児から小学校時代まで、あなたは運動遊びやスポーツを積極的にやりましたか？

*C 中学校時代には、あなたはスポーツを積極的にやりましたか？

*D 高校時代には、あなたはスポーツを積極的にやりましたか？

表24 現在、行なっているスポーツを始めたきっかけ

Item	f	%
1 体を動かしたい	102	20
2 他人からすすめられて	54	10
3 クラブに魅せられて	53	10
4 自分を試してみたい	39	8
5 技術的な魅力	37	7
6 仲間との交流	35	7
7 その他	205	38
Total	525	100

い”8%，“技術的な魅力”7%，“仲間との交流”7%である。1位の20%を除いて、2～6位は7～10%の範囲である。この結果より、参加動機については各個人さまざまでありそのため答えが分散されたと考えられる。しかし、大きく2つに分けて見ると、“体を動かしたい”と“仲間との交流”という動機が中心となっているようである。

表25は正課体育を受講し、それがきっかけでClubへ所属するようになった者を示している。実際に正課体育がきっかけでClubへ所属した者はClub所属階層全体の6%である。バドミントン、硬式テニス、水泳、バスケットボール、オリエンテーリング、ハンドボールなどの前に指摘された比較的手軽に楽にできる種目を選択されている。ただし、ラグビー5名は注目すべき結果と言えるだろう。数字からみると正課体育がきっかけとなりClubへ所属した者は少ないかもしれないが、逆に、正課体育が6%も影響を及ぼしたと考えることもできよう。授業が持つ可能性や時間的条

件の制約の中で示された結果であり、わずかであろうが評価しておきたい一面である。

表25 正課体育がきっかけとなり Club へ所属した人数の分布

Item	f	%
1 陸上運動	1	3
2 器械運動	1	3
3 水 泳	3	9
4 オリエンテーリング	2	6
5 剣 道	1	3
6 サッカー	1	3
7 ラグビー	5	15
8 バスケットボール	3	9
9 バレーボール	1	3
10 ハンドボール	2	6
11 硬式テニス	5	15
12 バドミントン	8	24

※ (総数：33名, Club 階層全体に占める割合：6%)

3. 参加状況

Club 所属階層の所属団体における活動状況を示した結果は図35, 図36に示してある。

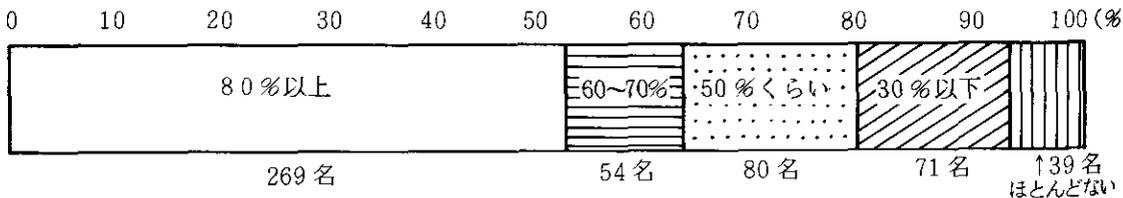


図35 所属団体の練習回数に対する出席率

図35より、所属団体の練習回数に対する出席率は80%以上と答えた者が全体の約半分を占め、50%以上と答えた者で見ると全体の約80%を占めている。しかしながら、ほとんど出席しないと答えた者が8%を占めており、このことは、Club所属階層ではあるが実際には活動をしていないと考えられる。この点に関しては本研究では明確にはできないが、実際の活動内容は各Clubによってかなり格差が大きいと考えられる。即ち、オリエンテーション愛好会、自然探険部、山岳部などの

Clubに属する者は活動内容の特性として、活動場所、時間、運動量などに関して大きな制限を受けると考えられる。しかしながら、全体としては、練習に良く出席して活動していると言える。

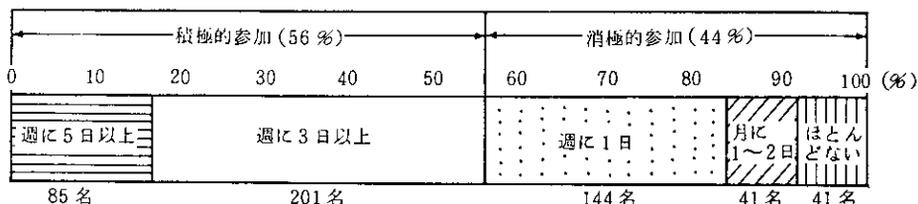


図36 実質的な練習日数

図36からも、図35同様にその所属団体の性質による格差が大きいと考えられる。即ち、実質的な練習日数が週に1日、月に1~2日、ほとんど出席しないと答えた者が全体の44%を占めているということからClub活動それ自体が少ない練習回数のClubであると考えられる。何故ならば、前述した出席率ではほとんどが出席しているからである。一方、ほとんどでないと答えた8%の者に関しては、Clubに所属しているが名目だけで実際の活動には参加していないと考えられる。このことから、一般学生でClubに所属している者の活動回数及びその運動量は全体的にみて多いとは言えない。

4. 所属団体（活動）への要求

Club所属階層のその所属団体における活動に対する要求は図37、図38、図39に示してある。

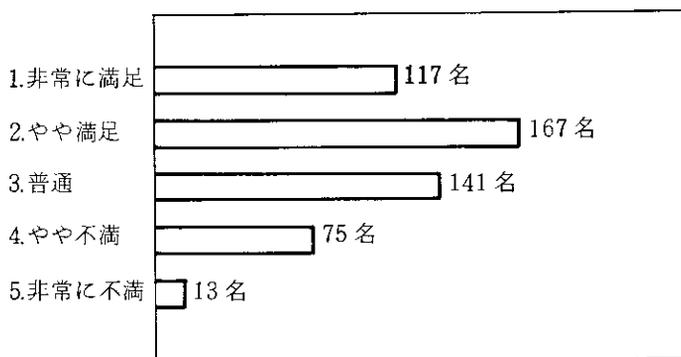


図37 活動に対する満足

図37は活動に対する満足度を示している。満足度としては普通からやや満足、非常に満足していると答えた者は全体の82%を占めている。一方、やや不満15%、非常に不満と答えた者が3%であり、全体の18%を占めている。この結果、活動に対する満足度に関しては全体的に満足感を持っていると考えられる。本研究では不満を持っている者に対する調査がされておらず、詳細な検討

は今後に残された。

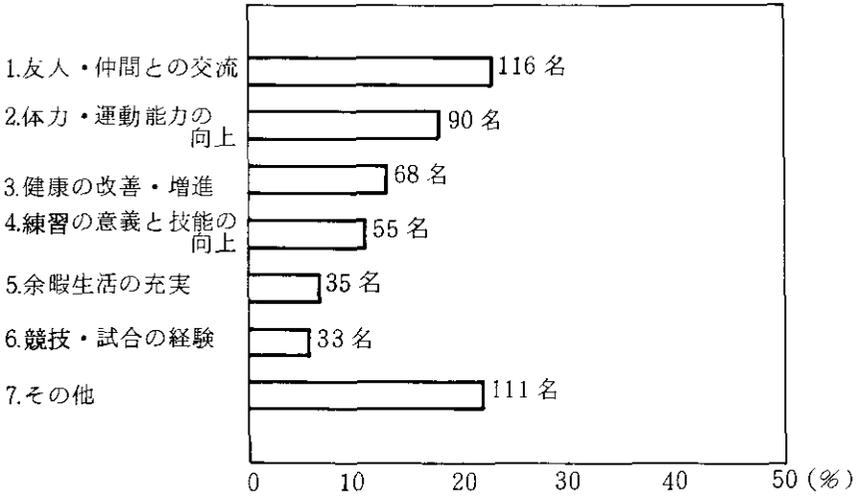


図38 活動に対して良かったと評価できたこと

図38は活動に対して良かったと評価できたことを示している。1位は“友人・仲間との交流”23%であり、以下“体力・運動能力の向上”18%、“健康の改善・増進”13%である。1～3位で全体の54%を占めている。この結果から、活動に対して良かったと評価できたこととしてあげられた点は、前述の参加動機で明らかになった点と呼応していると考えられる。即ち、参加動機で指摘された“体を動かしたい”と“仲間との交流”は活動に対する満足度や良かったと評価できたことに十分、反映されている。

図5は活動に対して良くない、あるいは改めたいと思われる点に関する結果を示している。1位は“時間的余裕”21%、以下“学業への影響”14%、“練習方法”10%、“経済的負担”10%、“練習のための施設・用具”10%である。この結果は大学体育研究第2号（1980）で報告されたスポーツの阻害条件（スポーツデーに関する調査で、対象者は筑波大学構成員“学生・教職員”によるアンケート調査）で明らかにされた結果とほぼ一致している。即ち、第2号の結果も“時間的余裕”、“経済的負担”、“場所・施設・用具”等が上位にあげられている。Club所属階層の注目すべき点は“学業への影響”であろうと考えられる。やはり、Clubで費やす時間が他の一般学生に比べ多くなり、その結果、勉強時間に制約を受けることになるのであろう。即ち、Club所属階層は活動と学業を両立させる必要が大きな条件となると考えられる。

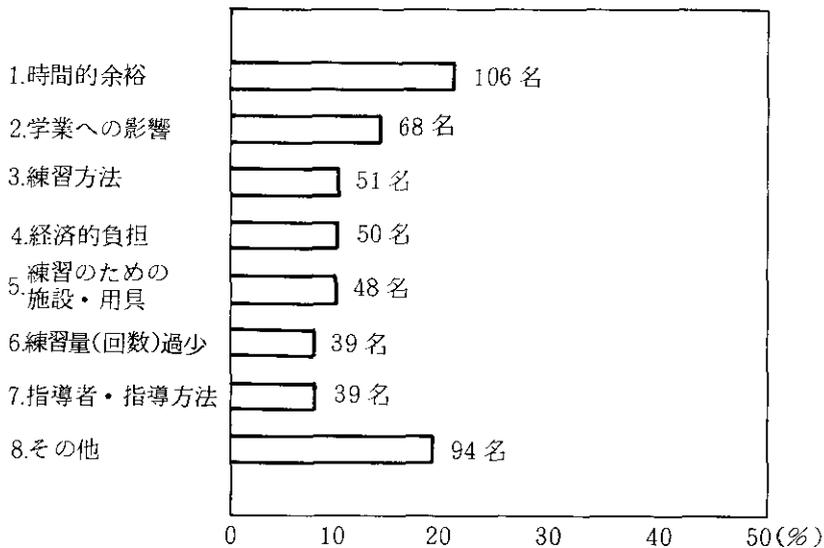


図 39 活動に対して良くない、あるいは改めたいと思われる面

5. Club 所属階層の健康・体力観

Club 所属階層の健康・体力観に関しては第3章第1節と第2節で述べられているので、ここでは概略についてのみ述べることにする。Club 所属階層の健康についての調査では91%の者が自分は“普通”あるいは“健康であると”と答えている。また自分の健康や体力にどの程度注意をはらっているかという質問に対して88%が注意をはらっていると答えている。このように、Club 所属階層は健康・体力に関して相当高い関心を持っている。前述（第3章第1節、第2節）のデータからも、Club 所属階層は一般学生と比べると高い関心を健康・体力にはらっているとと言える。スポーツデーやスポーツ教室などの各種の運動プログラムにも積極的に参加していると答えた者はClub 所属階層全体の72%を占めている。参加理由・動機については前述同様にスポーツが好きである、仲間との交流が大きな割合を占めている。やはり、ここでもClub 所属階層は一般学生よりも積極的に運動プログラムに参加していると言える。

6. ま と め

以上、今まで考察してきた中からClub 所属階層の運動生活の実態として明らかにされた点を以下にまとめる。

1. Club 所属階層はその約80%が過去に運動の体験がある。また、大学まで彼らの環境はスポーツや運動に対して積極的なものであった。このことは、Club 所属階層が運動生活に対して積極的な態度・認識を持っている結果と考えられる。

2. Club への参加動機は“体を動かしたい”と“仲間との交流”に大別でき、前報（大学体育研究第1号）と一致した。
3. Club への参加状況は全体的に高い出席率を示したが、ほとんど練習に出席しない者が8%いた。参加状況に関しては各Clubの性格による相違が大きく影響していると推察された。即ち、練習回数の非常にないClubが全体の46%を占めたことである。Club所属階層の活動への参加状況はその出席率が高いが、もともと各クラブの練習回数そのものは少なく、したがってその活動全体における運動量は多いとはいえない。
4. 実際のClub活動に対する満足度は80%近くが満足している。良くない点、改善すべき面では“時間的余裕”，“経済的負担”，“場所・施設・用具”が上位にあげられた。Club所属階層として注目すべき点は“活動”と“学業”の両立であろう。
5. Club所属階層は健康・体力に関して十分な注意を払い、また、自信もあり、さらに積極的に他の運動プログラムに参加している。
6. 最後に、正課体育とClub所属階層の関係であるが、本節§1では十分に明らかにすることができなかったが、正課体育がClub所属階層へ及ぼしたと考えられる影響として正課体育を受講したことがきっかけとなりClubへ入った者に関して考察した。正課体育がきっかけで運動部・同好会へ入った者はClub所属階層全体の6%であった。従来、Clubに所属している者は過去の運動体験（大学に入るまで）に大きく左右されているが、本研究で明らかになった6%については正課体育の量的（授業回数や授業時間など）な制限の中で影響した数字であり、いくぶんかは評価できる側面といえよう。今後さらに正課体育の履修を契機として、クラブへ所属して日常的にスポーツ活動を実施する学生が増加することが期待される。

§ 2 Program 参加階層の運動生活

筑波大学生のProgram参加階層のほとんどは（96%）学内運動プログラムに参加したものであり、その運動プログラムは表26に示すように3つに大別出来る。スポーツデー（正式種目）というのは、本大会に向けて数週間前から予選等が行われる種目であり、スポーツデー（オープン種目）というのは、本大会当日に申し込み参加が出来る種目である。また、スポーツ教室は大学生を含めて広く一般に公開された、のべ20数時間程度の教室である。

まず、program参加階層の健康に対する自己評価をみると、図40に示すように普通というのが59%で最も多く、あまり健康でないという者は12%であった。また、健康・体力に対して注意を払うことについては、ほとんどの者が時々はらう（73%）と答えている。そして、体力についての自己評価をみても多くの人が人並みの体力がある（77%）と答えており、体力はないと答えた者はわずか16%である。以上の事から、Program参加階層の体力・健康に関する評価は、人並み、あるいは普通と考えている者がほとんどであり、いわゆる“中程度意識”を多くの者が持っているといえよう。

表 26

1. スポーツデー（予選も含む正式種目）

コード表

A 卓 球	D ソフトボール	C バレーボール	J バドミントン
B バスケットボール	E 水 泳	H テニス	
C 剣 道	F サッカー	I 駅 伝	

2. スポーツデー（オープン種目）

コード表

A ハンドボール	C 運 動 会	E アーチェリー
B ラグビー	D 水 泳	F ライフル射撃

3. 公開されたスポーツ教室

コード表

A 硬式テニス	D 水 球	C 体力づくり	J ゴルフ
B 剣 道	E 飛 込 み	H エアライフル射撃	K バドミントン
C 弓 道	F 空 手	I ヨ ッ ト	L そ の 他

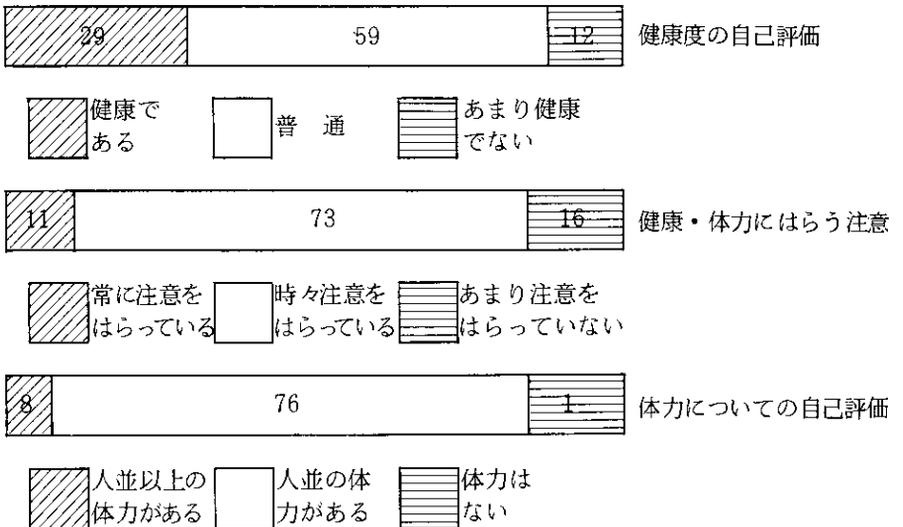


図 40

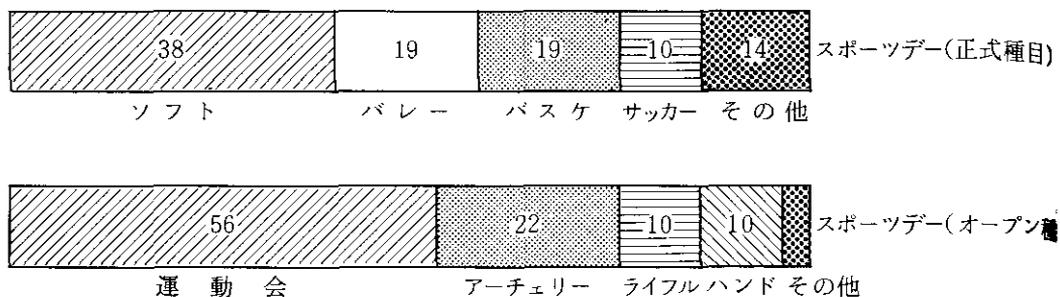


図41

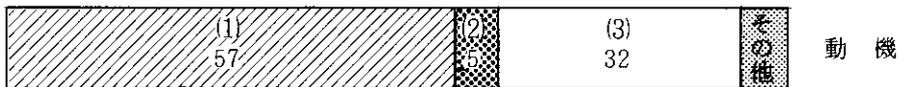
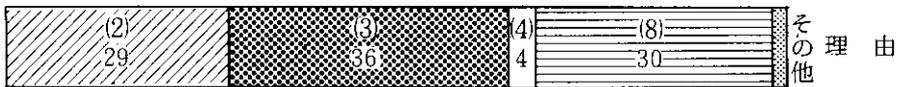
つぎに、Program参加階層のスポーツデー（正式種目）参加状況を見ても、図41で示すように、ソフトボール（38%）が全体の $\frac{1}{3}$ 近くをしめ、バスケットボール（19%）、バレーボール（19%）と続いている。一方、剣道、水泳等は共に1%以下という低い値にとどまっている。また、スポーツデー（オープン種目）の参加状況を見ても、図42に示すように、運動会（56%）が多く、アーチェリー（22%）、ライフル（11%）と続いている。そして、このスポーツデーの正式項目に対する参加状況とスポーツデーのオープン種目に対する参加状況を比較してみるとわかるように、比較的運動量の低い種目への参加が高いパーセントを示しており、ある意味で“手軽に出来るスポーツ”が好まれていると思われる。

一方、この運動プログラムに参加した学生の参加理由について、図42に示すアンケート回答項目から集計したのを見ると、気晴らしのため（36%）、スポーツが好きだから（30%）、交友関係を広げるため（29%）の3項目で全体の95%をしめており、身体を丈夫にするため、スポーツ技術のみがくため等は非常に低いパーセントを示している。この傾向は、前述の運動量の必要性が低い種目に多く参加するという状況と密接に関係していると思われ、Program参加階層の1つの大きな特徴であると考えられる。また、参加後の変化として、気分転換（33%）、交友関係の広がり（27%）、クラスのまとまり（20%）などが高いパーセンテージを示し、生活におけるアクセントとして、また交流の場を求めてプログラムに参加していると思われる。

以上の事より、本学における学内運動プログラムサービスは、学生生活におけるアクセントをつ

けたり，気分転換をすることや，交友・交流の場としてのはたらきを相当程度はたしてはいるものの，日常的運動生活の形成，スポーツの生活化に対する働きかけとしては，まだその機能を十分に果していない状況にあると思われる。

理 由	動 機
1. 身体を丈夫にするため	1. 友達にさそわれて
2. 交友関係をひろげるため	2. クラスやグループの代表に選ばれて(仕方なく)
3. 気晴らしのため	3. 自分から進んで
4. 生活を楽しく豊かにするため	4. 会場に行ってみて，面白そうだったから
5. スポーツ技術をみがくため	5. プログラムの案内をみて
6. 新しい運動をおぼえるため	6. 正課体育の授業で経験したので
7. 自分の体力をたしかめるため	7. その種目の経験があったので
8. スポーツが好きだから	8. 何となく
9. その他()	9. その他()



参加後の変化

A 生活の規則正しさ	H 良いリーダーシップやフォロアシップの養成
B 交遊関係のひろがり	I 新しい運動種目の理解
C スポーツの楽しさに対する意識	J 自己の体力についての認識
D 健康への関心	K スポーツへの関心
E 授業への影響	L スポーツをする時間の増減
F クラスのまとまり	M 気分転換
G スポーツ技術の向上	N その他()



図 42

○Program 参加階層と正課体育との関係

表27は、Program 参加階層の希望する正課体育科目を示したものであり、各種目に分散しているのが分かる。また、その理由（表28）も多岐に渡っているが、特に中・高時代の経験が一つの要因となっていると思われる。

そして、表29は正課体育授業に対する期待を示したものである。運動不足の解消（29%）、楽しみの増加（14%）などが高いパーセントを示し、体力の向上などは比較的低い値となっている。

この傾向は、前述の学内プログラムサービス参加理由と共通するものであり、本学の Program 参加階層はスポーツを生活におけるアクセント、交流の場としてとらえている傾向が強いと思われる。その原因の一つとして、学内プログラムサービスが単発的、行事的プログラムになりやすく、日常的、継続的スポーツ活動への働きかけが指いと考えられる。しかし、行事的プログラムであっても、年間を通して時間的にも空間的にも計画的にプログラムサービスを配置する事によって、継続的プログラムへの移行、運動・スポーツの生活化への展開が可能であると思われ、学生生活と運動プログラムとがより有機的に結びつくと考えられる。もちろん、それには運動プログラムをサポートする情報サービスや、ヘルス・ケアサービス等のより一層の充実が必要であると言えよう。

表27 希望する科目

間接科目	パーセント (%)
体操トレーニング	2
陸上	2
基本運動	0
器機運動	0
水泳	6
オリエンテーリング	0
サイクリング	1
ゴルフ	7
ライフル射撃	5
弓道	1
柔道	2
剣道	6
空手	0
サッカー	6
ラグビー	6
バスケットボール	6
バレーボール	19
ハンドボール	9
野球	3
ソフトボール	3
硬式テニス	3
バドミントン	6
卓球	2
トリム運動	1
ウォーターフロントスポーツ	3

表28 希望する理由

理由	パーセント (%)				
A	23	G	1	M	3
B	13	H	10	N	1
C	10	I	1	O	0
D	19	J	1	P	2
E	5	K	0	Q	2
F	9	L	0	R	0

- A 中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから
- B 中学・高校の体育の授業で経験した種目なので
- C この種目なら人並にできると思ったので
- D やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので
- E 体力や運動能力を高めたいと思ったので
- F その種目の技術をいっそう高めたいので
- G その種目について、もっと深く知りたいので
- H 運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので
- I 自分の身体的条件(ケガや障害など)に適した種目なので
- J 苦手な種目だが、あえて挑戦しようと思ったので
- K スポーツのマナーや態度を養いたいので
- L 体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだったので
- M 友人や仲間にすすめられたので
- N 指導教官にひかれて
- O 筑波大学でしか履修できないと思ったので
- P 施設の条件が恵まれているので
- Q 自然とのふれあいを求めて
- R 友人や仲間との交流を求めて

表29 正課体育に期待する事

期待する事	パーセント (%)
日常からの解放	6
新しい体験	12
健康の増進	11
体力の向上	9
友人との交流	4
情緒の安定	1
楽しみの増加	14
知識・情報の取得	2
運動不足の解消	29
集中力・忍耐力の養成	1
自然とのふれあい	2
技術の向上	8
スポーツのルールやマナー	0
学習するよろこび	0
その他	0

§ 3 Area 利用階層の運動生活

第3節§3の目的は、余暇時に自由に運動している（Area 利用階層）学生の活動の実態を明らかにするとともに、それら学生の正課体育への対応を調べることに、さらにArea 利用を活発にするために、現在の問題を明らかにすることである。

昭和56年6月実施された「運動生活に関する調査」のQ8、Q19、Q20、Q21、Q22-6、Q23-3、Q26を資料とし、Q8と他の設問をクロス集計し、考察をすすめた。

筑波大生の中でArea 利用階層に属する学生数は、全体の28.4%であり、そのうち自由時間に運動する、に加えプログラムに参加するは46%、自由時間のみは54%であった。（図43参照）

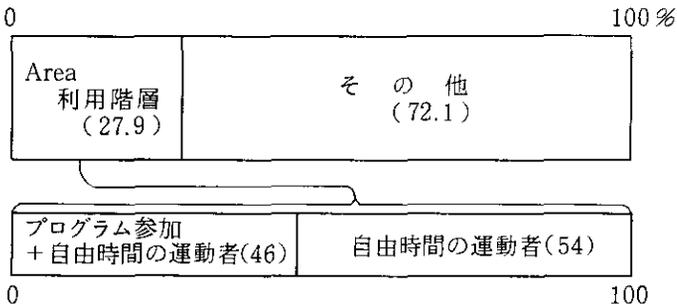


図43 筑波大学における Area 利用階層者の割合

1. Area 利用階層学生の運動生活の実態

(1) 運動場所について

Area 利用階層に属する学生は全体の28.4%（361名）であるが、そのうち学内で実施した学生数は84.2%（304名）で、学外で実施した学生は12.2%（44名）であった。

つまり、Area 利用階層の84.2%もの学生が学内の運動施設や広場等を利用して自由に運動をしている。そこで、学内のどのような施設を利用しているかをみると、図44、表30のようになっている。

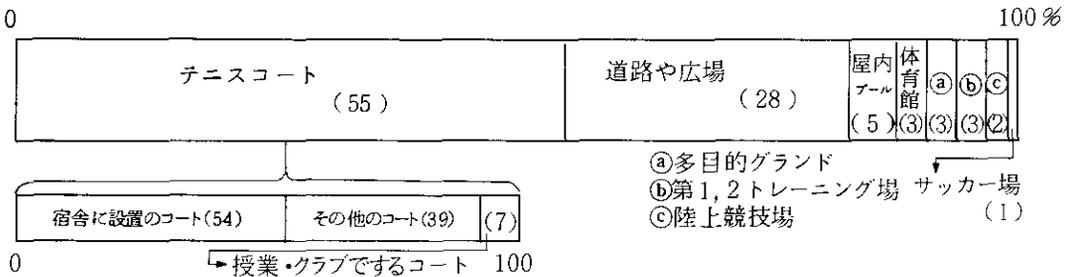


図44 主に利用した施設

表30 利用したことのある施設

100人中の実施者数	施設名
45人以上	道路や広場
41～45	
36～40	
31～35	
26～30	
21～25	一の矢テニスコート
16～20	中Cテニスコート, 平砂テニスコート
11～15	中Bテニスコート, 追越テニスコート
6～10	多目的グラウンド, 中Aテニスコート, 第1・2トレーニング場, 屋内プール
1～5	陸上競技場, サッカー場, ラグビー場, 屋外プール, バスケット場, 格技体育館, 体芸テニスコート, 西グラウンド, ゴルフゲージ, ダンス場, 野球場, 第1・2・3体育館, 球技体育館
0	弓道場, アーチェリー場, ハンドボールコート, 体操場, 体操競技場, ライフル射撃場

最も多くの学生が、主に利用する施設はテニスコートの55%である。テニスコートのうちでも宿舎近くに設置されているコートの利用はそのうち53.6%であった。しかし、授業、クラブ活動で使用することになっているコートでは利用の割合が低い。次に主に利用する場所としては広場や道路の28%であった。

この一年間で利用したことのある施設をみると、広場や道路が最も多人数に使用されており、次いで宿舎に設置のテニスコート、授業・クラブ活動に関係のないテニスコート、多目的グラウンド、第1・2トレーニング場、屋内プールなどであり、最後の2つの施設をのぞいては、自由にいつでも使用できる施設(場所)の利用が多いことがうかがえる。

(2) 運動の時間帯について

① 曜日について

主として運動をする曜日について、まとめたものが図45である。この図からも明らかなように土曜、日曜の両日で53%にもなる。次いで高い割合をしめすのが一週間のほぼ中間にあたる水曜であり、以上のことは図46(運動をしたことがある曜日)からも同じ傾向がみられた。

水曜が会議等のため午後から授業がほとんどないことを考慮すると、運動をする曜日としては、授業の比較的少ない、もしくはない曜日に多くの学生(71%)が運動をおこなっているようである。

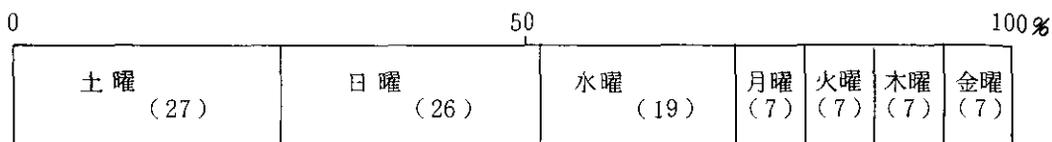


図45 主に運動する曜日

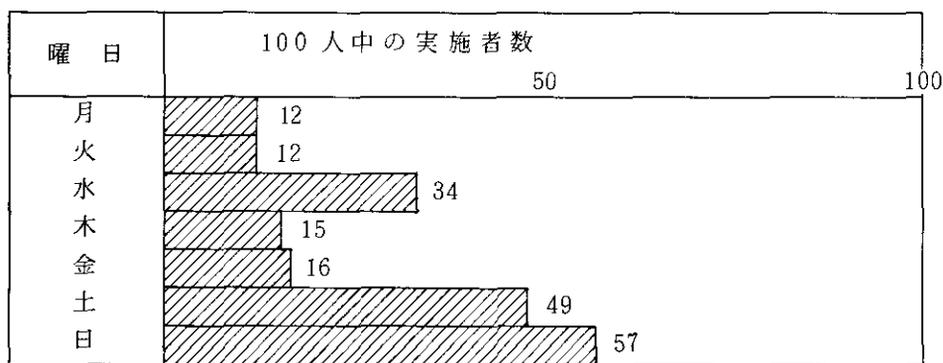


図46 運動したことのある曜日

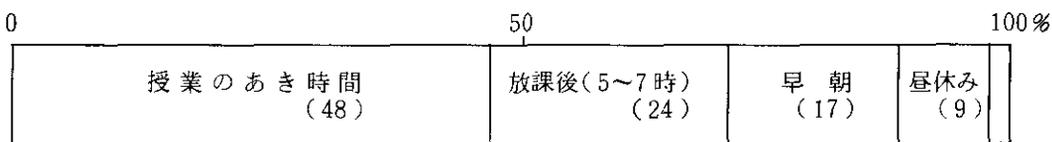


図47 主に運動をした時間帯

夜間(7時以降)(2) ←

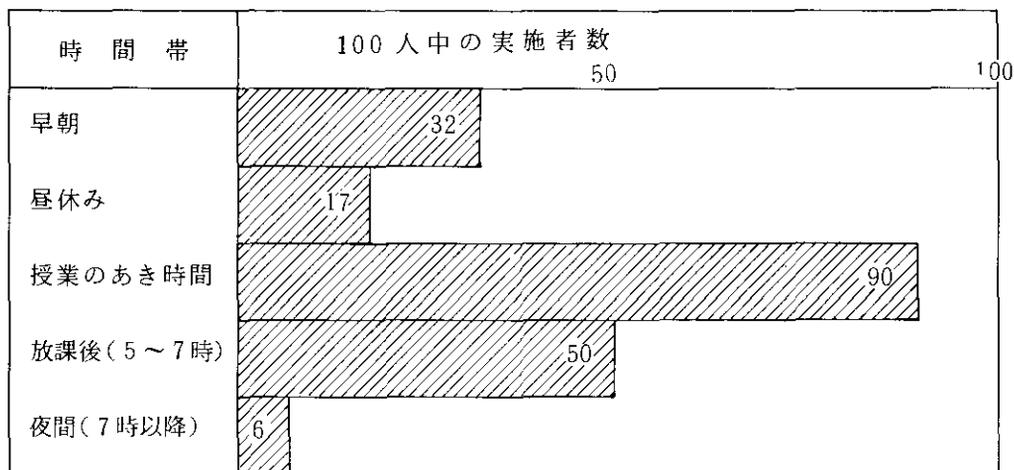


図48 運動をしたことのある時間帯

②時間帯について

図47は1日のうちで主として運動を実施する時間帯をあらわしたものである。

授業のあき時間が最も多く48%で、次いで放課後（5～7時）の24%、早朝の17%で、小・中学校などにみられる昼休みに行く割合は低い。この傾向は運動をしたことのある時間帯（図48）をみても同じである。特に、授業のあき時間に行ったことのある学生が100人中90人もいることは、大学の授業時間帯、実施とも大きく関係していると思われる。

(3) 運動を実施する頻度

図49は運動の実施頻度をあらわしたものである。

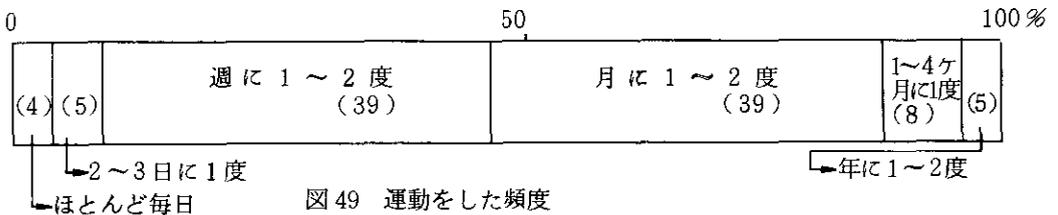


図49 運動をした頻度

運動の強度、量など問題はあるが、運動の体力への効果があるといわれる、ほとんど毎日から週に一・二度という頻度で行っている学生が48%もいる。しかし、月に一・二度以下の頻度の学生も約半数強の54%もおり、これらの学生にはまだ生活の中で運動（スポーツ）をすることは定着していないと思われる。

(4) 運動の内容

図50, 51にみられるように、自由時間に行う運動としては、簡単なゲームや手軽に行う練習（キャッチボール、円陣パスなど）が最も多く、全員が少なくとも1回は行っている。

本格的なスポーツゲーム及びその練習を行っている学生が22%もいることは、正式な試合などが、見たり聞いたりするものから自分で体験するようなものとしてとらえられつつあることがうかがえる。これは学内のスポーツ・デー（本年で4年目を向える）の競技会が少なからず動機となっていると考えられる。

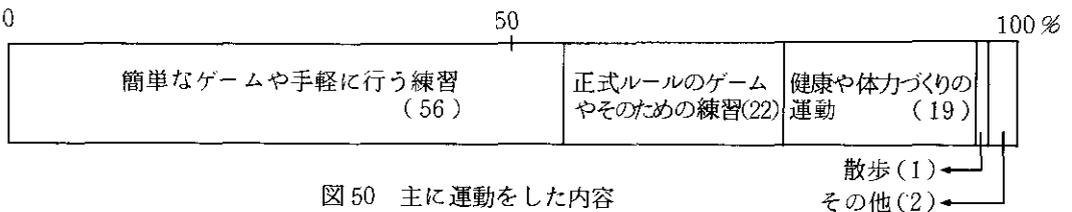


図50 主に運動をした内容

そして、多くの社会人にみられるような「運動をする＝健康、体力の維持・増進」という意識で主に運動をする学生は19%であり、まだ多くの学生がそれ以外の意図でもって運動を実施している

ことがうかがえる。

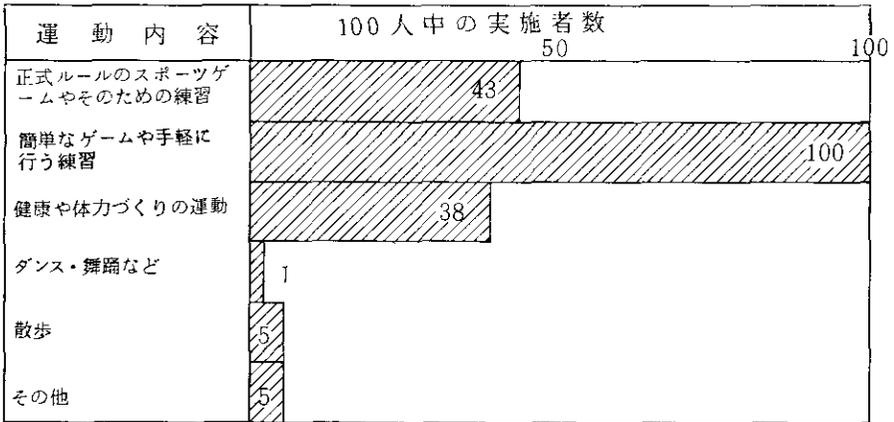


図 51 運動したことのある内容

2. Area 利用階層学生と正課体育

(1) 正課体育への満足度

図 5 2 は現在履習している正課体育に対する Area 利用階層の満足度をあらわしたものである。

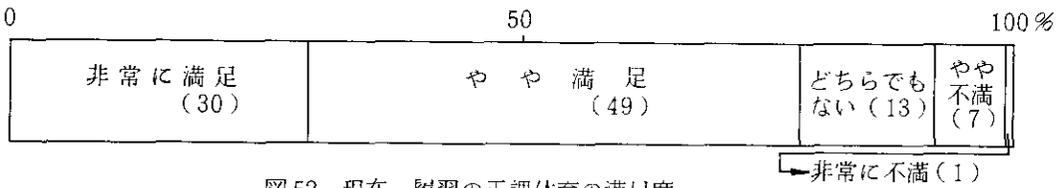


図 52 現在、履習の正課体育の満足度

図から明らかなように程度に違いこそあれ、満足している学生は 79% であり、不満をもたないという範囲では 92% にもなる。しかし、少ないとはいえ不満をもつ学生が 8% もあった。

教師サイドとしては、満足している学生が相対的に多いことにものみ目を向けず、不満をもつ学生がいることにも留意すべきであろう。

(2) 正課体育への期待

表 3 1 図 5 3 は正課体育に期待していることをあらわしたものである。

二つの図表から明らかなように、「運動不足の解消」、「健康の増進」、「体力の向上」の割合が高く、運動をする = 健康、体力の維持・増進という構図をもち、体育の授業に参加していることがうかがえる。次に「楽しみの増加」、「新しい体験」、「日常からの解放」と日常生活ではえれな

い、日常生活とはきりはなれた場として体育場面をイメージしていると思われる。

「技術の向上」、「知識・情報の取得」、「スポーツのルールやマナー」など、授業時に教師が学生に与えている事項に関しては、技術の向上は他の2つよりは期待度が高いものの、学生全体の29%であり、それほど期待しているとはみなされない。

表31 正課体育で期待していること(1)

最も期待していること	人 数	(%)
運動不足の解消	87	(24)
楽しみの増加	63	(18)
健康の増進	49	(14)
体力の向上	43	(12)
新しい体験	31	(9)
技術の向上	26	(7)
日常からの解放	19	(5)
友人との交流	15	(4)
集中力・忍耐力の養成	8	(2)
知識・情報の取得	4	(1)
スポーツのルールやマナー	3	(1)
自然とのふれあい	2	(1)
情緒の安定	1	(0)
学習するよろこび	1	(0)
そ の 他	6	(2)
合 計	358	(100)

(3) 正課体育と自由時間の運動種目との関係

表32は正課体育で受講したことがきっかけで自由時間に運動するようになった学生の割合とその種目をあらわしたものである。

Area 利用階層学生の26.9%が正課体育で受講したことがきっかけでその種目を自由時間に行うようになったと回答している。

そして、その種目としては硬式テニスが最も多いが、これは硬式テニスが大学までの体育授業で行われることがあまりないことや、現在のテニス人気などが関係すると思われる。次に多い水泳に関しては、小、中、高校で少なくとも数回は経験していると思われ、正課体育での受講がきっかけで自由時間に行うようになったことは注目すべきことと思われる。今後の課題としてきっかけとなった理由をもう少し検討する必要がある。

図 53 正課体育で期待していること(2)

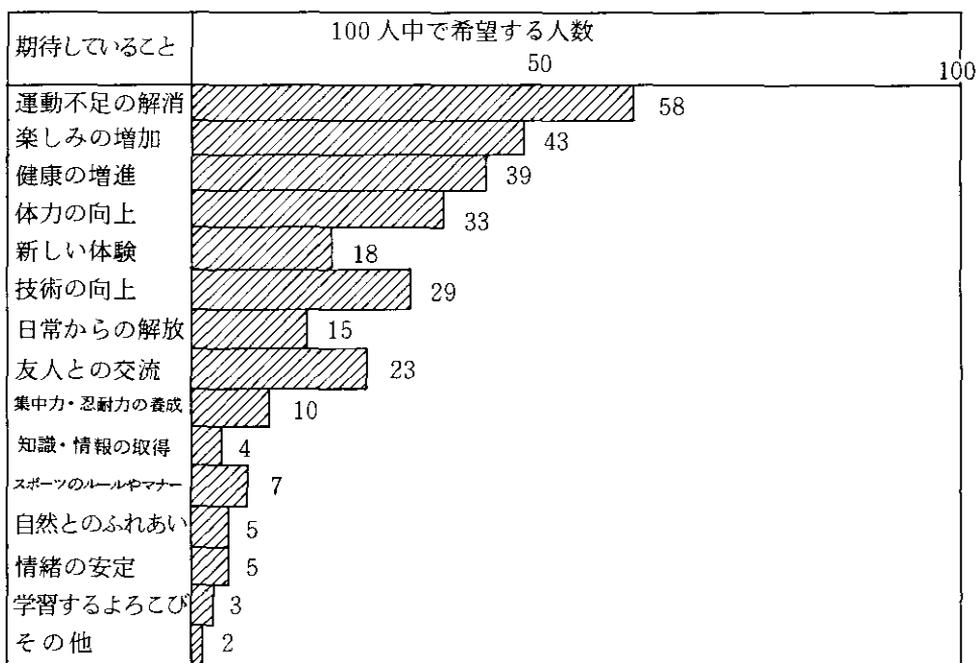


図 53 正課体育で期待していること(2)

表 32 正課体育で受講したことがきっかけとなり、自由時間にその種目をやった割合とその種目

	人数	(%)		人数	
きっかけとなった学生	97	(26.9)	→	硬式テニス	42
きっかけとならなかった学生	264	(73.1)		水 泳	18
合 計	361	(100.0)		卓 球	9
				サッカー	6
				体操トレーニング	6
				バスケット	5
				ゴルフ	3
				バレーボール	3
				ソフトボール	2
				バドミントン	2
				サイクリング	1

3. Area 利用階層への対応

(1) 自由時間の運動を阻害する要因

図 5 4, 5 5 は余暇時に自由に運動を楽しむことができなかった理由をあらわしたものである。調査対象全員の理由としては「時間がとれない」、次に「施設・用具の手続きがめ

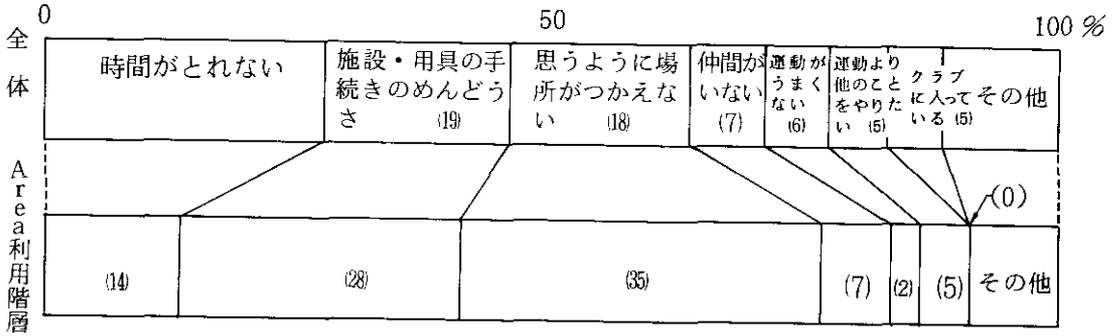


図 54 自由時間に運動をできなかった、主な理由

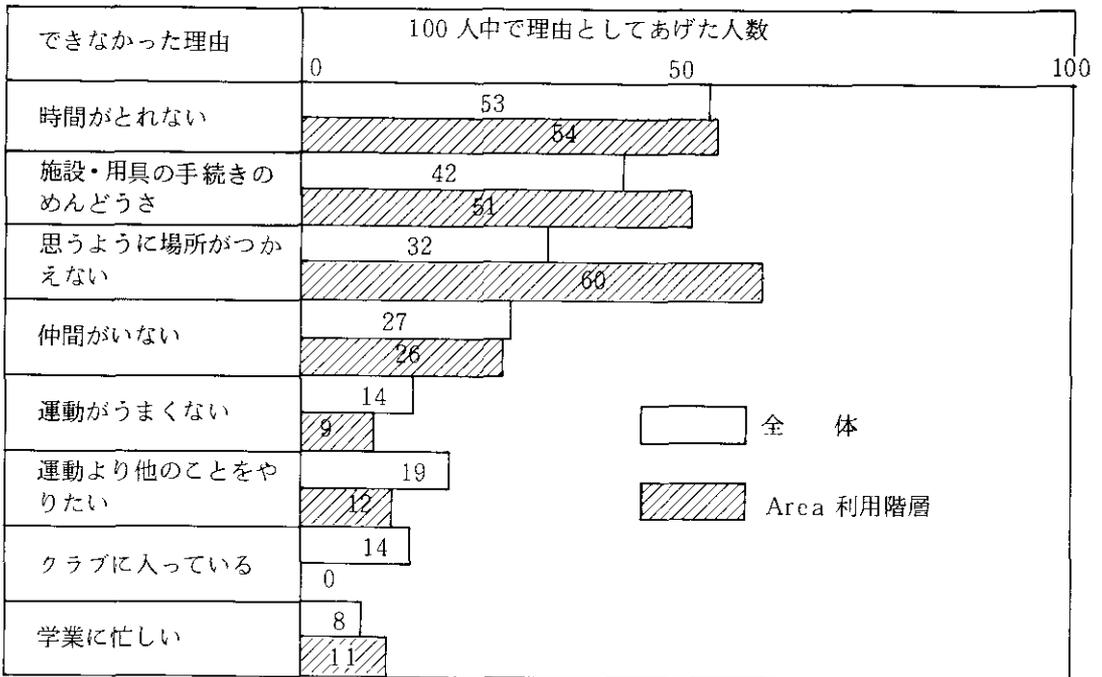


図 55 自由時間に運動できなかった、ことに関係した理由

らんど」，そして「思うように場所が使えない」となっているが，Area 利用階層の学生においては「思うように場所が使えない」，次に「施設・用具の手続きがめんどろ」，「時間がとれない」となっている。このことは，全体では主体者側の理由が運動をやらなかった一番の理由となっているのに比べ，Area 利用階層では，環境上の問題が理由となっている点に大きな違いがあることを示す。

上記以外の理由で高い割合をしめす項目は，「仲間がいない」であり，各自の自由時間に自分の好きな運動を行うためにはさけることのできない要因があげられている。

(2) Area 利用者のための改善点

図 56，57 は今後，余暇時に自由に運動するために望んでいることをあらわしている。

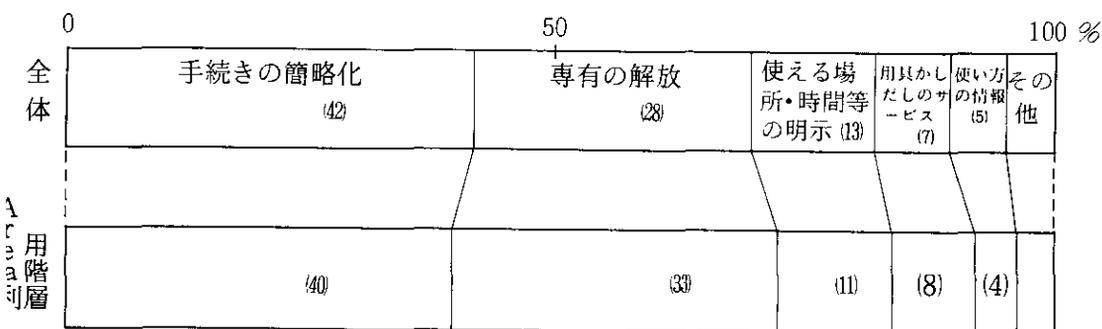


図 56 自由時間に利用するために最も望んでいること

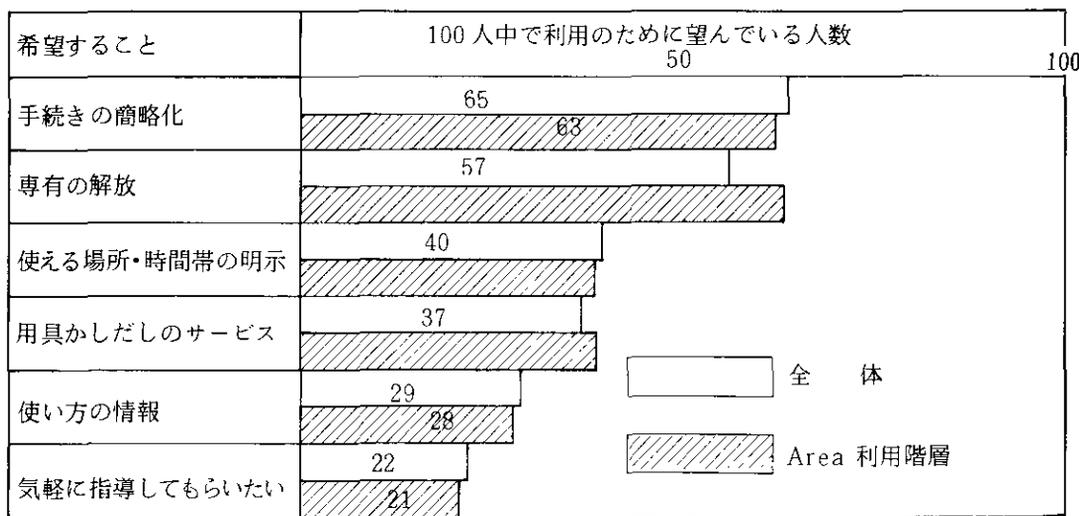


図 57 自由時間に利用するため望んでいること

全体もArea利用階層でも大きな違いはなく、やらなかった理由として高い割合を示した利用の際の手続きのめんどろさの裏返しとしての「手続きの簡略化」の要望が高い割合を示している。

次に、運動場所にいった時に使えないという状況からでてくる問題に対して、「専有されているのを解放する」、「使える場所と時間帯の明示」という2つの要望がだされている。

(3) Area利用者が希望する施設

表33, 図58 は今後もっと自由に利用したい施設をあらわしたものである。

最も希望の多い施設は屋内プール, テニスコート, そして体育館である。これら三つの施設の中でいつでも自由に使用できる可能性があるのはテニスコートであり, それでも希望が高いことは絶対数の不足を示唆していると思われる。絶対数(量)の問題に加え, 屋内プール, 体育館における専有, 使用可の情報, 管理方法などは今後, 検討すべき問題と思われる。

表33 自由時間に最も利用したい施設

施設名	全体 (%)	Area利用階層 (%)
屋内プール	22	20
テニスコート	18	24
(1) 授業・クラブで使用	(6)	(8)
(2) 宿舎近くの	(7)	(5)
(3) その他	(5)	(11)
体育館	9	11
トレーニング場	6	6
野球場	6	6
多目的グラウンド	5	5

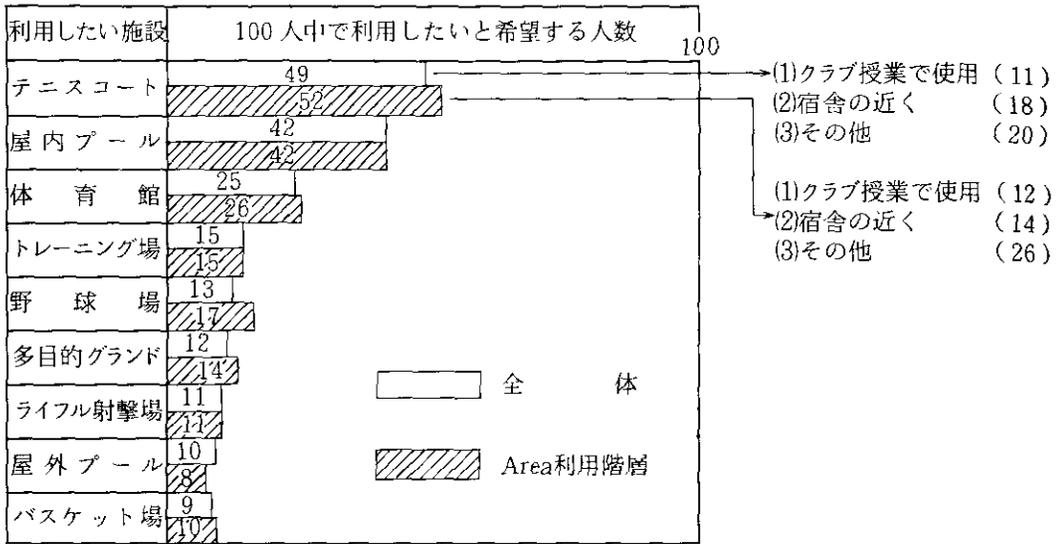


図 58 自由時間に利用したい施設

ま と め

- (1) Area 利用階層の運動生活の実態としては、テニスコートなどを主に、近くで、いつでも自由に使える場所の利用度が高い。そして、土、日および水曜という授業が少ないか、あるいはない日の日中とか夕方に運動を行っている。約半数近くの学生が週一、二度以上の割合で、簡単なゲーム、手軽な練習を中心に、体力・健康のために、また正式のゲームなども楽しんでいるようである。
- (2) 正課体育に対しては90%以上もの学生が不満なく授業にとりこんでおり、体力・健康の維持・増進のための運動量と日常生活ではえられない体験、喜びなどを期待している。正課体育で受講したことがきっかけとなりそのスポーツを自由時にやるようになった学生は約27%もおり種目としては硬式テニス、水泳などがあげられる。
- (3) Area 利用階層の学生及び他の学生の余暇の自由な運動を促進させるためには、使用可能な施設と時間帯の情報、特定の団体の施設専有の制限、使用時の手続きの簡略化など今後、検討を要する問題が提示された。さらに、既存の施設の絶対数(量)の問題も再度みなおす必要があると思われる。

§ 4 Stay 階層の運動生活

ここでは運動クラブに所属せず、運動プログラムにも参加せず、また学内で自由な時間においてもなんら意図的に運動をしない階層、いわゆる Stay 階層について考察するものである。

1. Stay 階層の体力・運動能力

昭和56年4月に実施された全学生対象の体力・運動能力テストの結果をもとにして、本調査を行った者で Stay 階層と Stay 階層以外に分け、その平均値と、両グループの有意差を検定（t 検定）したものを表 34 に示す。

男・女共に Stay 階層の運動能力値の低いことがわかり、男子では、ほとんどの項目で 0.1% 水準で有意差があり、女子では、すべての項目に 5% 以上の有意差が認められた。

女子においては、筋力（背筋力）、柔軟性（体前屈）等の項目より、巧緻性、協応性を要するサイドステップやハンドボール投の成績が低いことが興味深い。

男子においても、柔軟性（体前屈）以外は顕著な違いを示し、すべての面にわたって体力・運動能力の低いことがわかる。

ここで、Stay 階層の者の、健康・体力に対する自己評価を表 35 に示す。健康に対しては、29% の者が「あまり健康でない」と答えているが、体力に対しては、41% の者が「体力はない」と答えている。これは、自分でも体力のなさを感じているものが少なくないことを示している。

自信のある体力要因として挙げているものでは、防衛体力に関するものがほとんどを占め、5 番目になって「細かい動きの器用さ」といった行動体力に関するものがあらわれる。

以上のように、Stay 階層は体力・運動能力が全般にわたって劣っており、また、自己の体力についても自信のない者が多い、ということが明らかになった。

そこで、Stay 階層の過去の運動生活について、小学校まで、中学、高校と分けて調査した結果を図 59 に示す。

中学時代、高校時代と年齢が増すに従い、スポーツに対して積極性が減少していることがわかる。また、Stay 階層の者の家族も、どちらかという、スポーツに対して消極的な態度であったという傾向がみられる。

特に、高校時代においてスポーツに対する積極性が極端に減少しているが、これには、受験戦争といわれる現代の高校生活の一面が大きく影響しているのではないかと思われる。

以上をまとめると、Stay 階層の体力・運動能力は、それ以外の者に比べて顕著に劣っており、又、彼らの運動・スポーツ離れは高校時代から増加してくることがうかがえる。

2. 運動・スポーツを行わない理由

Stay 階層が体育系課外活動団体（運動部、同好会）に所属しない理由について調査したものを、パーセンテージの大きい順にならば表 36 に示す。上位に「運動より他に好きなものがある」（29%）、「もともと運動が好きでない」（22%）、という解答があり、大きい比率を占めている。

両者とも Stay 階層の運動嫌いを端的に現わしたものである。

次に、Stay 階層が、学内の運動プログラムに参加しなかった理由について調査したものをパーセンテージの大きい順にならべ、表37に示す。

あげられた理由は、どの項目に関しても極端に比重が大きいということはなく、平均的に散らばっている。ここでも「運動がへた」（14%）、「運動が嫌い」（12%）、「参加してもつまらない」（13%）、という Stay 階層の運動嫌いを示す傾向がみられる。

次に、Stay 階層が、自由な時間に自由なやり方で運動を楽しむことをしなかった理由についての調査の結果を、パーセンテージの大きい順にならべ、表38に示す。

あげられた理由として、「時間がとれない」（22%）、「場所が使えない」（17%）、などの外的理由が大きいことがわかる。その次に、「運動がうまくない」「好きでない」という運動嫌いに関する理由が続いている。

クラブに所属しない理由、プログラムに参加しない理由のなかでは、「時間がとれない」という項目は大きな割合を占めてはおらず、逆に、自由時間に運動を行わない理由として、「時間がとれない」という項目が大きな割合を示すことは、理解に苦しむところである。

以上のように、Stay 階層が、クラブ、プログラム等の学内での様々な運動の機会に運動・スポーツを行わなかった最も大きな理由として、運動が好きでないことや、下手であることがあげられよう。また、自由時間においては、外的要因（時間、場所、手続）が大きな理由を占めている。

Stay 階層の者を運動・スポーツを行うように方向づけることは、体育・スポーツの一つの重要な目標であるが、そのためには、運動嫌いの解消が重要なポイントとなろう。これは、大学体育の指導における重要な問題であるとともに、運動に対する積極性が減少してくる中学から高校時代での、体育・スポーツの指導のあり方とも関連する問題といえよう。

3. Stay 階層の正課体育に対する対応

Stay 階層が、正課体育の開設科目について履習を希望したものを、希望の多い順に、表39に示す。比較的運動量の少ないと思われる種目（ライフル射撃、ゴルフ、弓道）に希望が多く、また、体操トレーニングが上位に挙げられているが、これは自己の体力不足の認識からと思われる。

履習希望理由を、表40に示す。「やったことがない、新しい体験をしようと思った」の割合が27%と高率ではあるが、これは、ライフル射撃、等、筑波大学には、他の大学以上に多くの新しい科目を開設しており、その影響と考えられる。また、「人並にできる」、「中・高での経験」、「できそうだ」等の手軽さ、なども Stay 階層の希望理由の多くを占めている。

ここで、第2部第2章に示した「正課体育の種目選択における動機に関する調査」より得られた、種目選択における動機の因子得点を各階層別に平均したものを、表41に示す。この表からも、Stay 階層の受構動機が、「その種目のもつ手軽さへの期待」の因子と、「運動を通しての自己変容の期待」の因子に大きく依存していることがわかる。これは、表40の、履習希望理由ともほぼ合致する

結果である。

以上のことから、Stay階層は、正課体育に対し、履習することにより、運動のコンプレックスを解消し、自己を変容することを期待するが、運動の欲求は強くなく、手軽なもの、目新しいものに興味を示す傾向があると、まとめられよう。

次に、Stay階層が現在の履習科目に対し、いかなる満足度をもっているかを、図60に示す。

現在履習している科目については、満足度は非常に高いことがわかる。

特に、不満の多い項目として、「4年間履習、種目選択方式」、「時間割」があげられる。

4年間履習に対する不満は、運動・スポーツに対し消極的で、運動嫌いに属するStay階層であれば、当然の結果と思える。また、種目選択方式については、希望の種目を選べないことに対しての不満であろう。

しかし、実際の授業の、学習内容、指導方法、評価、施設・用具、についての不満は非常に少ない。これは、4年間も正課を履習したくないという意見と合せて考えるならば、授業に対し不満がないということは、良いということではなく、不満の程度の意欲もない、という意味にも解釈できよう。

Stay階層が、正課体育に対し、何を希望しているかを調査したものの結果を、制度面（表42）内容面（表43）に示す。

制度面では、現行と変わらない「4年間4種目」が53%と多く、次に、「1学期1種目」（13%）の希望が多い。

内容面では、「運動不足の解消」、「健康・体力の増進」が多くの割合を占める。

Stay階層の、低体力状況から考えると、健康・体力の増進は、必要な要素であるが、運動・スポーツのそれ自体の楽しさよりも、運動不足、健康、体力などの、ごく一般的なスポーツそのものの以外の基準によってしか、自分の希望する正課体育を求められないことに、Stay階層の運動嫌いの一面がうかがわれよう。

4. まとめと今後の課題

体育系課外活動団体（運動部、同好会）に参加しておらず、学内の運動プログラムに参加せず、学内で自由な時間に、自由なやり方で運動をすることをしなかった学生をStay階層として、その運動能力や、不参加の理由、正課体育に対する対応について調査を行った。

結果を要約すると、

- (1) Stay階層の体力・運動能力は、Stay階層以外に比べ、ほとんどの面で有意に劣っている。
（女子5%水準、男子0.1%水準）
- (2) Stay階層の者は、自己の体力に対し自信のない者が多い。（41%）
- (3) Stay階層の者がスポーツに対し消極的になってくるのは、高校時代に入ってからの方が多かった。

- (4) Stay 階層が運動クラブに参加しない理由として、「運動以外に好きなものがある」(29%)、「もともと運動は好きではない」(22%)、の割合が大きく、Stay 階層の運動嫌いが示唆された。
- (5) Stay 階層が学内の運動プログラムに参加しない理由として、(4)と同様に、「運動がへた」(14%)、運動がきらい(12%)、「参加してもつまらない」(13%)、と運動嫌いの傾向が見られた。
- (6) Stay 階層が自由時間に運動をしなかった理由としては、「時間がない」(22%)、「場所が使えない」(17%)と外的要因に左右されていることがわかった。
- (7) Stay 階層の正課体育履習希望動機には、種目のもつ手軽さが大きく、運動への欲求は強くないが、運動のコンプレックスを解消することを期待している傾向がみられた。
- (8) 現在の正課体育に対する不満は、授業内容、指導方法、評価等よりも、4年間履習制度、種目選択方法、時間割などの制度面での不満が多かった。
- (9) Stay 階層が正課体育に期待するものは、「運動不足の解消」(32%)、「健康」(13%)、「体力の増進」(12%)が多くを占めた。

以上のように Stay 階層は高校時代からの運動に対する消極性、運動嫌いに起因するところが多く、それと表裏一体となって、体力、運動能力の低下がある。

Stay 階層を Stay 階層でなくするためには、制度面で、運動の場の提供、魅力ある運動プログラム・正課体育の授業、が必要であろう。さらに、Stay 階層の学生が持つ、運動嫌いの原因や、これまでの運動体験で生じたマイナス体験など心理的要因についても探る必要があると考えられる。

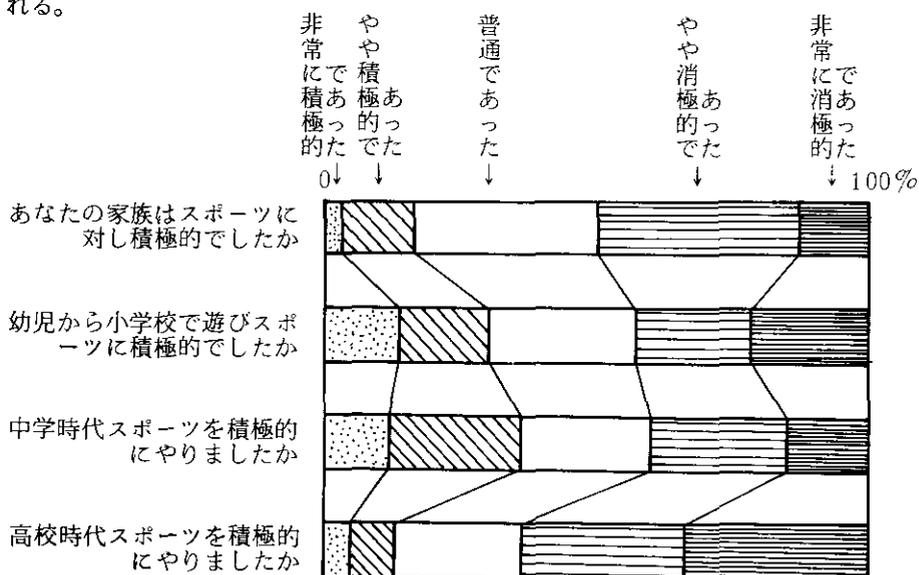


図 59 Stay 階層の過去の運動体験

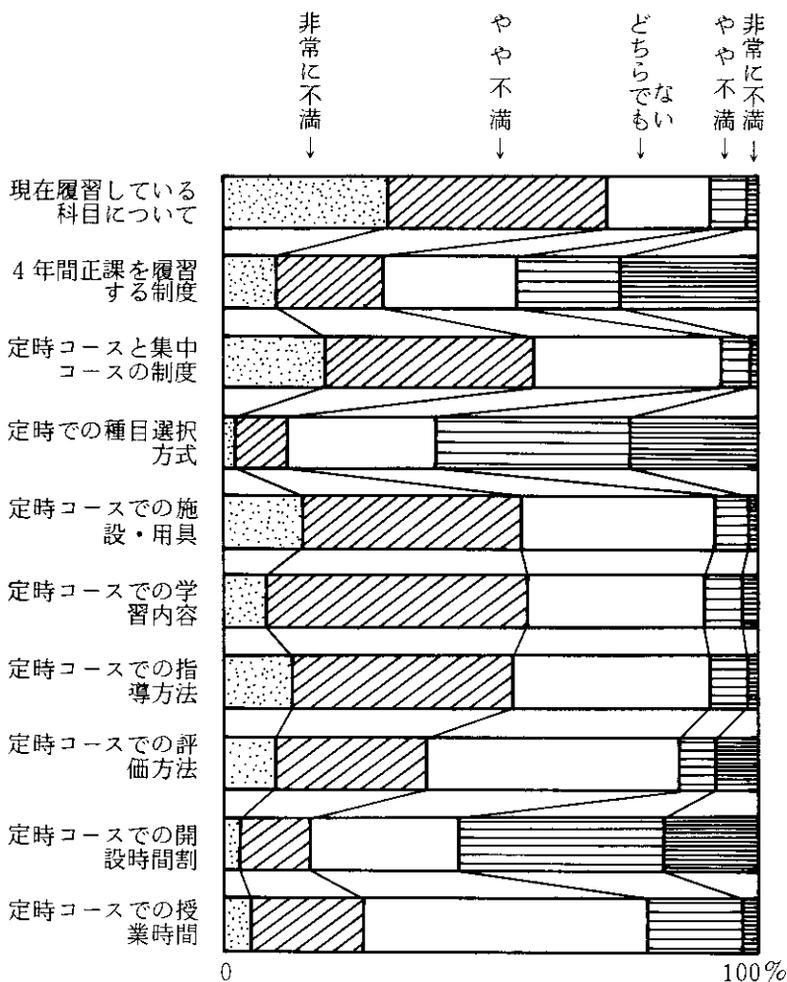


図60 Stay階層の現在の正課体育への満足度

表 34 Stay 階層, Stay階層以外の運動能力の比較

項 目		女	有意水準	男	有意水準
背 筋 力	Stay 階層	7 9.6 kg	*	1 3 0.6 kg	**
	Stay 階層以外	8 7.1 kg		1 3 8.9 kg	
垂 直 跳	Stay 階層	3 6.5 cm	**	5 4.7 cm	***
	Stay 階層以外	3 9.9 cm		5 7.9 cm	
5 0 m 走	Stay 階層	9.09 sec	**	7.55 sec	***
	Stay 階層以外	8.76 sec		7.26 sec	
立 巾 跳	Stay 階層	1 6 7.5 cm	**	2 2 4.6 cm	***
	Stay 階層以外	1 7 6.1 cm		2 3 3.0 cm	
体 前 屈	Stay 階層	1 5.1 cm	*	1 2.4 cm	N.S
	Stay 階層以外	1 7.2 cm		1 3.8 cm	
サイドステップ	Stay 階層	3 9.8 回	***	4 4.8 回	***
	Stay 階層以外	4 1.8 回		4 8.0 回	
ハンドボール投	Stay 階層	1 5.0 m	***	2 5.5 m	***
	Stay 階層以外	1 7.4 m		2 9.4 m	
上 体 お こ し	Stay 階層	3 7.2 回	*	5 2.1 回	***
	Stay 階層以外	4 4.5 回		7 0.8 回	
1 2 分 走	Stay 階層	2 0 5 9 m	***	2 4 2 6 m	***
	Stay 階層以外	2 2 5 3 m		2 6 6 9 m	

有意水準

***	0.001 >
**	0.01 >
*	0.05 >

表 35 Stay 階層の健康・体力に対する自己評価

項 目		(%)
自己の健康に対する評価	健康である	21
	普通	52
	あまり健康でない	29
自己の体力に対する評価	人並以上の体力	3
	人並の体力	56
	体力はない	41
自信のある体力要因として挙げられたもの	病気に対する免疫	21
	環境の変化に対する適応力	18
	精神的ストレスへの抵抗力	12
	病気に対する抵抗力	10
	細かい動作での器用さ	10
	動き全体を調整する協応さ	5
	運動に対する意欲	5

表 36 Stay 階層が体育系課外活動団体（運動部、同好会）に所属しない理由

運動部、同好会に所属しない理由	(%)
運動より他に好きな活動があるから	29
もともと運動が好きでないから	22
特別思い当たらないが、何となく	10
時間をとり、疲れが学業に影響するから	8
運動は好きだが、うまくないから	5
身体が弱く、体力がないから	5
自分の入りたいクラブや同好会がないので	3
経費がかかりすぎるから	3
自分の思うやり方で練習できない	2
入りたいが、きっかけがつかめない	2

表 37 Stay階層が学内の運動プログラムに参加しない理由

運動プログラムに参加しなかった理由	(%)
運動がへたなので	14
自分がやりたい運動種目がなかった	14
参加してもつまらないと思った	13
もともと運動が嫌いなので	12
一緒に参加する適当な仲間がいなかった	10
早朝から試合があり、めんどうだった	8
運動プログラムについて、よく知らなかった	6
身体が弱い、身体が故障していたので	5
参加したかったが、人数などの制限があった	3
疲労の残ることが心配であった	2

表 38 Stay階層か、自由時間に、学内の運動施設を利用して自由なやり方で運動を楽しむことをしなかった理由

自由なやり方で運動を楽しむことをしなかった理由	(%)
時間がとれない	22
思うように場所が使えない	17
施設や用具を借りる手続きがめんどう	11
運動がうまくないので気がすまない	11
運動はもともと好きでない	10
運動より他の活動をしたい	9
仲間や相手がみつけにくい	6
仲間の雰囲気では何となく運動しないような感じで、自分もしない	5
身体が悪いので運動できない	3
学業が忙しく運動しているわけにはいかない	1

表39 Stay階層の正課体育履習希望科目

履習希望科目	(%)
ライフル射撃	11
ゴルフ	9
硬式テニス	9
体操トレーニング	8
サイクリング	8
バドミントン	6
卓球	6
弓道	4
バレーボール	4
野球	4

表40 Stay階層の正課体育履習希望理由

履習希望理由	(%)
やったことがないが、新しい体験をしようと思った	27
この種目なら人並にできると思った	16
中・高のクラブ活動で経験した種目	8
体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだった	7
中・高の体育の授業で経験した	7
体力・運動能力を高めようと思った	7
その種目の技術をいっそう高めたい	6
運動不足の解消	5
その種目について、もっと深く知りたい	2
筑波大でしか履習できないと思った	2

表41 各階層別の受講動機の因子得点

因子	階層	各階層の因子得点の平均			
		Stay階層	Club 所属階層	Program 参加階層	Area 利用階層
第1因子 (将来的展望に伴う、学習および精神的充実への期待)		-0.264	0.105	-0.199	0.027
第2因子 (運動欲求および体力・自己の能力向上への期待)		-0.428	0.031	0.057	0.152
第3因子 (その種目のもつ手軽さへの期待)		0.074	-0.020	-0.058	0.071
第4因子 (過去の経験による依存)		-0.254	0.039	0.137	0.059
第5因子 (その種目のもつ人的条件、人的むすびつきへの期待)		-0.196	0.100	0.101	-0.034
第6因子 (運動を通じての自己変容への期待)		0.212	-0.046	-0.092	-0.012

表42 Stay階層が正課体育の制度面で希望するもの

Stay階層が正課体育に対して希望するもの	(%)
好きな種目を1種目選択し、4年間続ける	12
学年毎に好きな種目を選択し、4年間で4種目	53
学年毎に3種目くらい選択し、1学期に1種目	13
学年毎に基礎体力づくりの運動やいろいろの種目をまんべんなく	2
1～2年は、基礎体力づくりを、3～4年は、生涯体育へつながる	9
その他	12

表 4.3 Stay階層が正課体育の内容面で希望するもの

Stay階層が正課体育に対して 希望するもの	(%)
運動不足の解消	32
健康の増進	13
体力の向上	12
楽しみの増加	11
新しい体験	10
日常からの解放	9
技術の向上	4

第4節 正課体育履修の実態とその対応

大学の正課体育は、生涯スポーツへ導く方向で展開されねばならないが、そのためには筑波大学の学生が日常生活の中で運動をどのように取り入れていて、どのように正課体育に対応しているかを把握しておくことが必要となってくる。

学生の、運動生活についての全般的傾向を適確に把握できれば、それらは、正課体育のあり方や具体的な授業方法の改善にむけての有益なバックデータとすることができる。また、それらをもとに、正課体育の中で学生の運動に対する意識を高め、意欲を喚起してやることも可能となる。

第4節は、正課体育履修の実態とその対応について、運動生活との関連などから考察したものであり、正課体育のカリキュラム編成体制と教育方法の改善に向けてのバックデータとなるものを得ようとしたものである。

表44は、正課体育の履修現況について示したものである。“履修を希望したが、受講できなかった種目”としては硬式テニスが多いが、これは、表45の“これから、最もやってみようと思うスポーツ”、“現在、最も日常的に行っているスポーツ”とも一致しており、硬式テニスの人気がうかがえる。また、本学でしか受講できないと思われるライフル射撃、やバドミントン、バレーボールのようなボールゲームに履修希望が集中している。

“種目選択で決められ、仕方なく受講した種目”では、陸上競技、体操トレーニングなど個人で行う運動に多いようである。また、“これまでに履修した種目”では、体操トレーニング、サッカーなどが多いが、これは、種目の特性よりも、開講している時間数や受講者数との関連の影響が大きいように思われる。

表 44 正課体育の履修現況

(%)

質問内容	順位	1	2	3	4
これまでに履修した種目		体操・トレーニング (14.2)	サッカー (10.9)	バスケットボール (8.7)	陸上運動 (7.6)
履修を希望したが、受講できなかった種目		硬式テニス (22.7)	バドミントン (17.7)	ライフル射撃 (11.6)	バレーボール (9.7)
種目選択で決められ、仕方なく受講した種目		陸上運動 (20.7)	体操トレーニング (16.9)	柔道 (12.3)	器械運動 (9.5)

表 45 スポーツに対する関心度

(%)

質問内容 \ 順位	1	2	3
最も興味、関心を持っているスポーツ	野 球 (14.9)	硬式テニス (10.5)	スキー (6.4)
これから、最もやってみようと思うスポーツ	硬式テニス (17.0)	スキー (8.7)	水 泳 (4.2)
現在、最も日常的に行っているスポーツ	硬式テニス (16.7)	ソフトボール (8.6)	卓 球 (8.6)

表 46 正課体育履修による影響について

(%)

質問内容 \ 順位	1	2	3	4
受講がきっかけとなって、体育系課外活動団体に所属するようになった種目	—	—	—	—
受講がきっかけとなって、スポーツデー等に参加して運動するようになった種目	サッカー (24.7)	バスケットボール (18.1)	バレーボール (16.7)	硬式テニス (8.7)
受講がきっかけとなって、自由時間に自由に運動するようになった種目	硬式テニス (45.0)	水 泳 (11.7)	体操トレーニング (9.5)	卓 球 (8.1)

表 46は、正課体育履修による影響について示したものである。*正課体育で受講したことがきっかけとなって、その後、スポーツデー、スポーツ教室に参加して運動するようになった種目”としてはサッカー、バスケットボール等、球技系の種目で占められている。*受講がきっかけとなって、自由時間に、自由に運動するようになった種目”としては硬式テニスが非常に多いが、これは現在のテニスブームに加え、学内のいたるところにテニスコートがあり、自由に利用できるということに関連していると思われる。また、水泳、体操トレーニング、卓球も施設が解放されているため、学生が自分の健康のためや趣味として運動を行っているということが考えられる。

表 44で、硬式テニスの履修を希望しながら受講できなかったという者が非常に多いことがわかる

が、表46から、硬式テニスは正課体育の受講がきっかけとなって運動するようになった者も多いということがわかる。硬式テニスの受講者数を増やすことが可能であれば、正課体育の受講をきっかけとして、自由時間に運動するようになる者が増えるということが予測できよう。

「受講したことがきっかけとなって体育系課外活動団体に所属するようになった種目」を特定することはできなかった。現在の正課体育は、体育系課外活動団体に参加させるまでの影響力はないものの、自由な形で運動をするようにさせるといった影響力は十分あると考えられる。

図61は、現在の正課体育定時コースに関する質問に対する満足度を示したものである。満足しているものとしては、「年間を通じての定時コースと、シーズンごとの集中コースを開設する制度」、「定時コースで用いる施設、用具の条件」、「定時コースにおける学習内容」、「定時コースでの指導方法」があり、「定時コースの種目選択方法」、「定時コースの開設時間割」については、不満と答える者が多かった。特に、「定時コースの種目選択方法」では、65%の者が不満と答えている。これは、学生の授業に対する意欲にも大きな影響を与えることなので、十分な検討が必要だと思われる。また、これらの質問に対する満足度は、学年ごとの集計においても同様な結果を得たので、学生の正課体育に対する意識は、四年間であまり変化していないということが考えられる。

図62は、正課体育の受講のしかたに対する意識について示したものである。現在の受講のしかたである「学年毎に好きな種目を一種目選択し、四年間で四種目くらい受講する」が54.3%で最も多く、ついで「学年毎に希望する種目を三つくらい選択し、一学期に一種目ずつ受講する」が20.8%という結果であった。この結果から、現在の受講のしかたは、一応、学生に支持されていると考えられる。

56年度の正課体育の開設科目の選択については、次のような結果となっている。

表47は、開設科目の履修希望について示したものであるが、硬式テニス、ライフル射撃、バレーボール、ゴルフ、ハンドボールの順で希望が多く、球技系の種目や中学、高校の体育では受講できないような種目に希望が集中している。これは、表44の「履修を希望したが、受講できなかった種目」と同じような結果となっている。

表48は、第一希望の開設科目を希望する理由を示したものであるが、「やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので」、「中学、高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから」、「その種目の技術をいっそう高めたいので」などの理由が多かった。また、表49は、各種目の最も多い希望理由を示したものである。希望する理由で最も多かった「やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので」という理由では、ライフル射撃やウォーターフロントスポーツなど、本学でしか履修できないと思われるような種目のほかに、弓道、空手などの武道関係の種目が目立っている。「中学、高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから」という理由ではバスケットボールなどの球技系の種目、「その種目の技術をいっそう高めたいので」という理由では硬式テニスが多い。硬式テニスは、施設、環境に恵まれ、自由にプレーできるので、技術についての意識を持っているものと思われる。また、「この種目なら人並にできると思ったので」という理由では、器械運動、ソフト

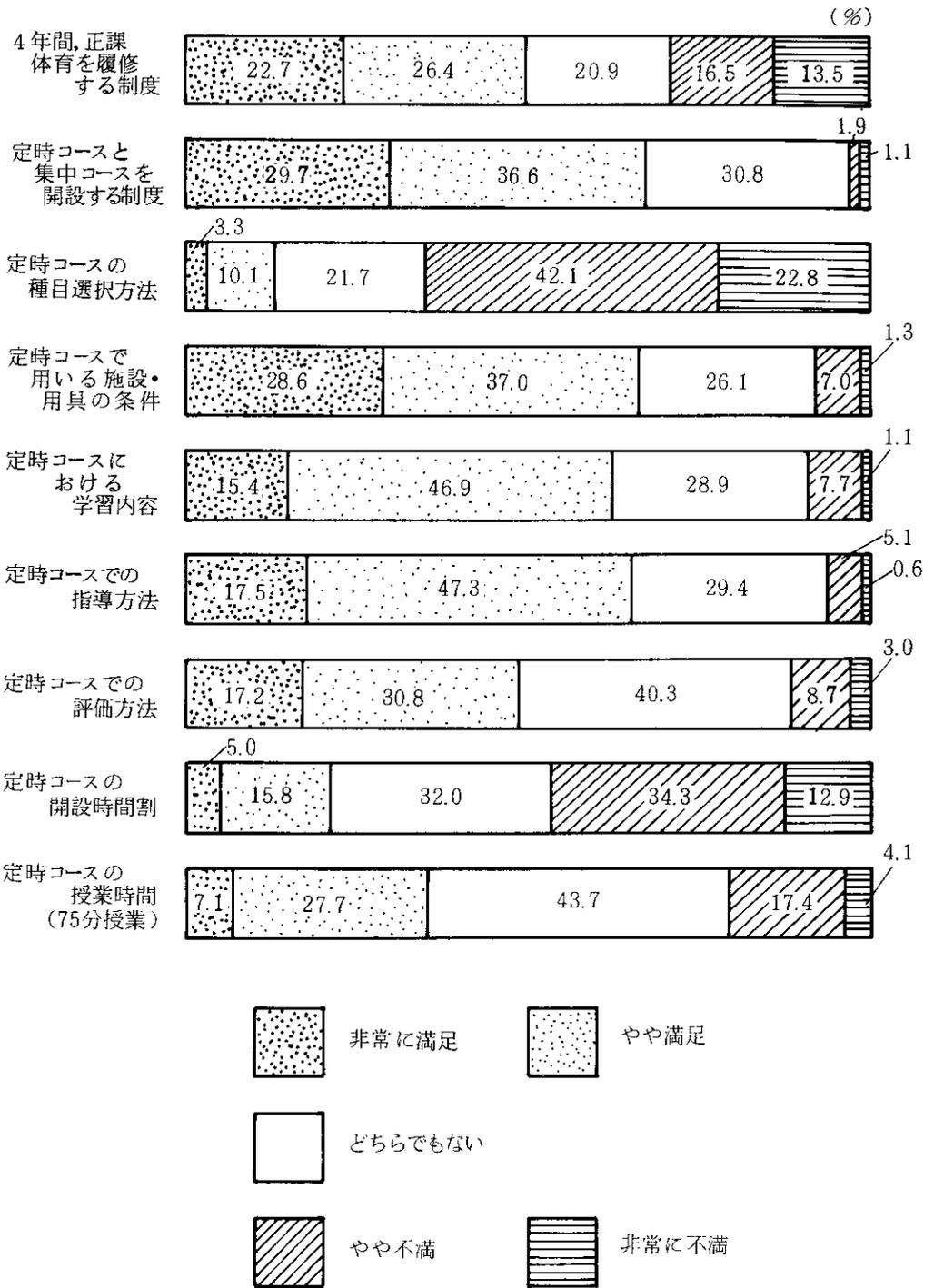


図61 現行の正課体育に対する満足度

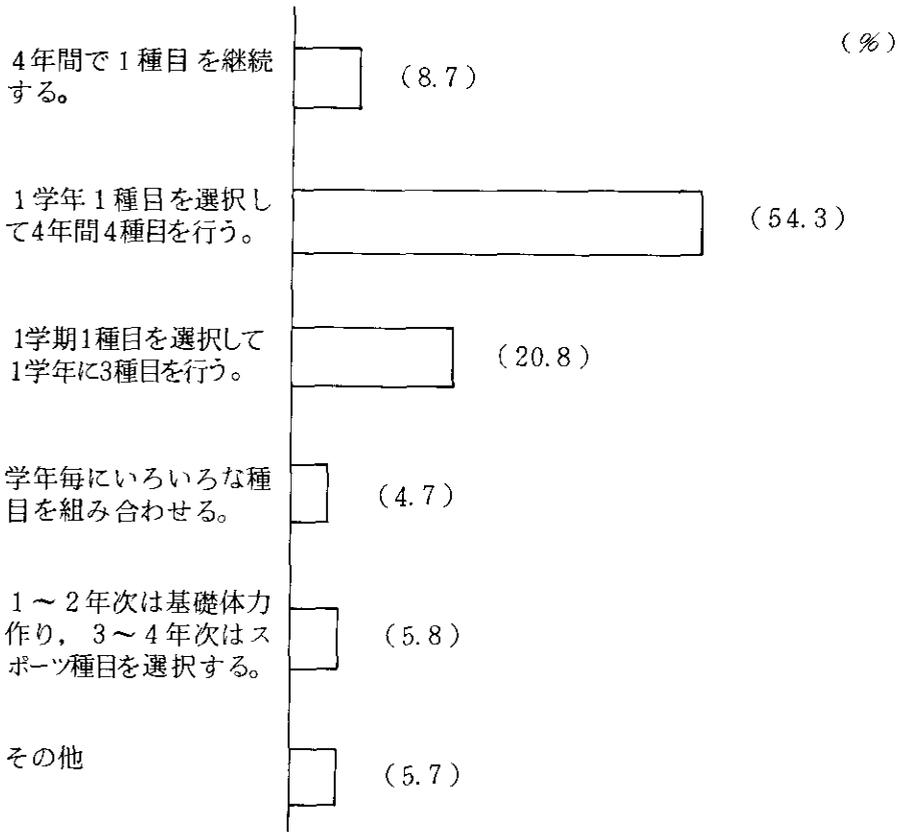


図 62 正課体育の受講のしかたに対する意識

表 47 開設科目の履修希望現況

科目名	f	%	科目名	f	%	科目名	f	%
硬式テニス	172	13.7	バスケットボール	47	3.8	空手	18	1.4
ライフル射撃	104	8.3	卓球	46	3.7	陸上運動	15	1.2
バレーボール	95	7.6	体操トレーニング	43	3.4	器械運動	15	1.2
ゴルフ	80	6.4	弓道	43	3.4	オリエンテーリング	9	0.7
ハンドボール	63	5.0	ソフトボール	41	3.3	トリム運動	8	0.7
水泳	61	4.9	ラグビー	39	3.1			
サッカー	59	4.7	ウォーターフロントスポーツ	39	3.1			
サイクリング	55	4.4	基本運動	37	3.0			
バドミントン	52	4.2	剣道	37	3.0			
野球	49	3.9	柔道	24	1.9			

表 48 履修希望の理由

希 望 し た 理 由	f	%
やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので	316	25.4
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから	210	16.9
その種目の技術をいっそう高めたいので	158	12.7
この種目なら人並にできると思ったので	119	9.6
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので	92	7.4
体力や運動能力を高めたいと思ったので	81	6.5
運動不足を解消し、健康の増進をはかりたいので	61	4.9
その種目について、もっと深く知りたいので	33	2.7
施設の条件が恵まれているので	32	2.6
筑波大学でしか履修できないと思ったので	27	2.2
体力や技能が劣るが、この種目ならできそうだったので	21	1.7
自然とのふれあいを求めて	19	1.5
友人や仲間におすすめられたので	18	1.4
苦手な種目だが、あえて挑戦しようと思ったので	14	1.1
指導教官にひかれて	12	1.0
自分の身体的条件（ケガや障害など）に適した種目なので	12	1.0
友人や仲間との交流を求めて	10	0.8
スポーツのマナーや態度を養いたいので	7	0.7

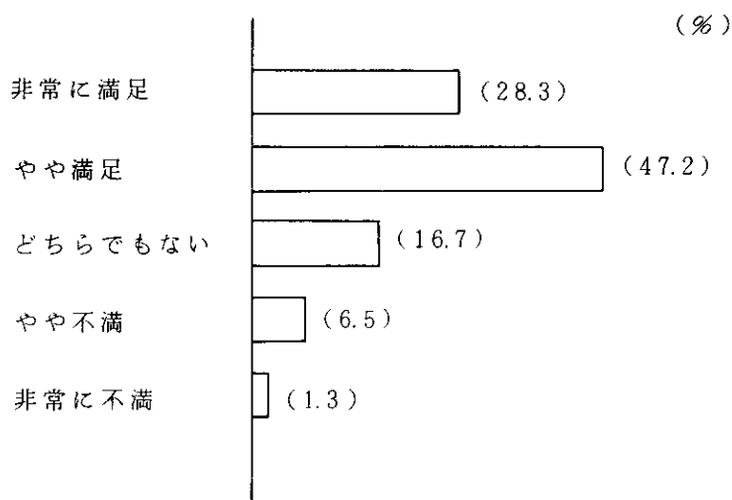


図 63 現在、履習している種目に対する満足度

表 49 各種目の最も多い希望理由

希望した理由	種目名
やったことがないが、新しい体験をしようと思ったので	ライフル射撃, 弓道, オリエンテーリング, 空手, ウォーターフロントスポーツ, ゴルフ, 剣道, 柔道, ラグビー
中学・高校のクラブ活動で経験した好きな種目だから	バスケットボール, バレーボール, 野球, サッカー, 水泳
その種目の技術をいっそう高めたいので	硬式テニス
この種目なら人並にできると思ったので	器械運動, サイクリング, ソフトボール, バドミントン, 卓球, 基本運動
中学・高校の体育の授業で経験した種目なので	ハンドボール
体力や運動能力を高めたいと思ったので	体操トレーニング, 陸上運動
自分の身体的条件(ケガや障害など)に適した種目なので	トリム運動

ボールなど運動量が少なく、気軽に運動できるような種目が多いようである。

図63は、現在、履修している種目についての満足度を示したものであるが、不満に思っている者は9%だけで、75%の者は、現在、履修している種目について、満足していると答えている。

これまで、正課体育履修の実態について述べてきたが、これらと学生の運動生活との関連についてみてみた。第2節で運動生活の類型と階層的把握について述べたが、これをみるとClub所属階層42%、Program参加階層7%、Area利用階層29%、Stay階層21%という結果であった。

図64は、「四年間、正課体育を履修する制度」に対する満足度について、運動生活の階層別にみたものである。これをみると、Club所属階層、Program参加階層、Area利用階層の三つの階層では満足と答えている者が約50%みられるのに対し、Stay階層では満足と答えた者は30%しかなく、逆に不満と答えた者は45%にも達している。このことから、「正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない」というStay階層の者は、授業で運動することに対してさえ、消極的だということがわかる。

表50は、学生が正課体育に期待することについて、また、表51は、そのことについて運動生活類型の階層ごとに上位5項目を示したものである。正課体育に期待すること、すなわち、受講目的としては、全体では「運動不足の解消」、「楽しみの増加」、「新しい体験」、「健康の増進」、「技術の向上」という順であったが、運動生活類型の階層ごとにみても、階層ごとに受講目的に特徴がみられる。Program参加階層、Area利用階層、Stay階層では、「運動不足の解消」が他の受講目

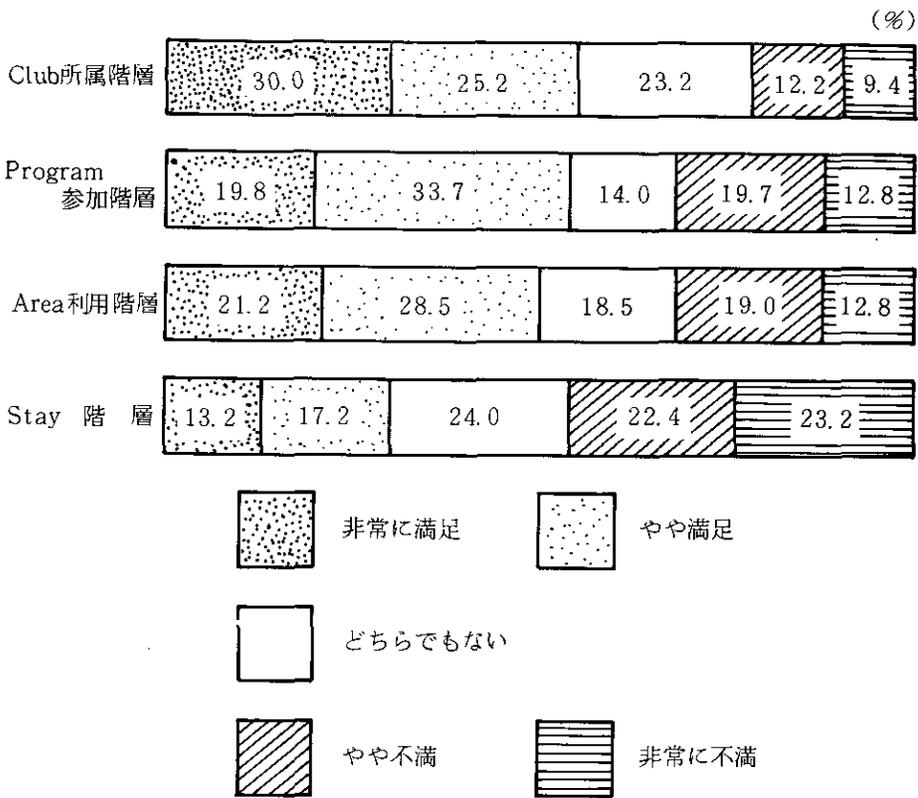


図64 「4年間、正課体育を履習する制度」について
運動生活類型別にみた満足度

表50 正課体育に期待するもの

項目	f	%	項目	f	%
運動不足の解消	268	21.7	集中力・忍耐力の養成	27	2.2
楽しみの増加	206	16.7	自然とのふれあい	12	1.0
新しい体験	167	13.5	情緒の安定	10	0.8
健康の増進	138	11.2	知識・情報の取得	10	0.8
技術の向上	129	10.4	学習するよろこび	8	0.6
体力の向上	122	9.9	スポーツのルールやマナー	4	0.3
日常からの解放	69	5.6	その他	11	0.9
友人との交流	55	4.4			

表 51 運動生活類型別にみた「正課体育に期待すること」上位 5 項目

(%)

Club 所属階層	Program 参加階層	Area 利用階層	Stay 階層
楽しみの増加 (19.2)	運動不足の解消 (29.4)	運動不足の解消 (24.4)	運動不足の解消 (35.7)
新しい体験 (18.2)	楽しみの増加 (14.1)	楽しみの増加 (17.7)	新しい体験 (11.9)
技術の向上 (16.5)	新しい体験 (11.8)	健康の増進 (13.8)	健康の増進 (11.9)
運動不足の解消 (11.2)	健康の増進 (10.6)	体力の向上 (12.1)	楽しみの増加 (11.1)
体力の向上 (10.5)	体力の向上 (9.4)	新しい体験 (8.7)	日常からの解放 (7.8)

的よりもかなり高くなっているが、Club 所属階層では、「運動不足の解消」は 11.2%と、他に比べかなり低くなっている。また、Club 所属階層では、「楽しみの増加」が受講目的として最も多いのであるが、上位 5 項目ともあまり差がなく、受講目的が多様である。さらに、他の三階層にはみられない「技術の向上」を受講目的とする者もあり、授業に対して積極的だということがわかる。

表 52 は、種目別に運動生活類型をみたものである。Club 所属階層の者が多い種目はオリエンテーリング、サッカー、ラグビーなど運動量の多い種目や空手、ゴルフなど新しい体験と思われるような種目、Area 利用階層では硬式テニス、ソフトボール等、球技系の楽しみながら行える種目、Stay 階層ではライフル射撃、卓球等、あまり運動量の多くない種目を選ぶ傾向にあるようにみうけられる。

これらのように、各階層で受講目的が異なり、種目選択でも選択の傾向がみられるなど、学生の運動生活と正課体育への対応とは、密接に関連しているといえよう。

まとめとして、次のようなことがいえるだろう。正課体育への対応では、「定時コースと集中コースを開設する制度」や「施設、用具の条件」など多くのことに学生が満足、支持していることがわかったが「定時コースの種目選択方法」や「定時コースの開設時間割」には、不満と答える者が多かった。また、正課体育履修による影響では、現在の正課体育は、体育系課外活動団体に参加させるまでの強い影響力はあまりないものの、自由な形で運動をするようにさせるといった影響力は十分あると考えられる。施設、担当者等の制約によって、学生全員に希望通りの種目を履修させることは不可能であるが、開設時限の設定方法を検討したり、種目選択の際のガイダンスなどもさらに検討する必要があると思われる。これらを改善することによって、学生の正課体育に対する意識を高め、意欲を喚起させることにつながるであろう。

学生の運動生活では「正課体育の授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない」Stay 階層の者は 21%だけで、Club 所属階層 42%、Program 参加階層 7%、Area 利用階層 29%と、全体ではなんらかの形で正課体育以外にも運動しているという者が 79%もみられた。しかし、Stay 階層では、「運動不足の解消」を受講目的とする者が特に多いのであるが、実際の種目選択で運動量

表 52 種目別による運動生活類型の割合

(%)

種目名	階層	Club 所属階層	Program 参加階層	Area 利用階層	Stay 階層
体操トレーニング		31.8	5.5	31.9	30.8
陸上運動		37.6	6.7	28.9	26.7
基本運動		42.9	1.1	34.1	22.0
器械運動		41.5	12.2	17.1	29.3
水 泳		46.5	11.3	28.2	14.1
オリエンテーリング		66.6	0	22.2	11.1
サイクリング		46.6	5.2	24.1	24.1
ゴルフ		55.3	6.4	27.7	10.6
ライフル射撃		37.5	4.2	20.8	37.5
弓 道		46.3	2.4	20.8	24.4
柔 道		41.3	7.9	25.4	25.4
剣 道		39.3	8.9	19.6	32.1
空 手		59.2	3.7	25.9	11.1
サッカー		59.5	5.4	19.0	16.2
ラグビー		56.1	7.3	17.0	19.5
バスケットボール		39.9	4.4	40.0	15.6
バレーボール		40.0	26.0	22.0	12.0
ハンドボール		50.7	13.0	31.2	5.2
野 球		42.9	9.5	40.4	7.1
ソフトボール		16.7	16.7	44.5	22.2
硬式テニス		32.5	2.5	51.3	13.8
バドミントン		53.8	11.5	15.4	19.2
卓 球		27.4	0	37.2	35.3
トリム運動		22.2	7.4	29.6	40.7
ウォーターフロントスポーツ		52.1	4.3	26.0	17.4

の少ない種目を選ぶ傾向がみられたり、四年間履修制度に対して不満と答える者が多かったり、授業で運動することに対してさえ、消極的だということがわかる。逆にClub 所属階層では、種目選択の際に、運動量の多い種目や新しい体験と思われる種目を選択したり、“技術の向上”を受講目的とするなど、正課体育の授業で運動することに積極的だということがわかる。このように、学生

の運動生活と正課体育への対応との関連をみていくと、各階層で受講目的が異なり、種目選択でも選択の傾向がみられるので、各授業においてどの階層の者が多いか判断し、それをもとに受講目的、運動量なども考慮し、指導方法や指導内容に生かしていく必要があるかと思われる。

これらの結果は、正課体育のあり方や具体的な授業方法に対する基礎的データであり、多くの示唆が得られたが、本学の正課体育四年間履修、スポーツ環境条件の充実などを十分に生かしての今後の授業改善に向け、さらに、各種目にデータをフィードバックしたり、より詳しく分析、検討していくことが必要と思われる。そして、解析結果をバックデータとして、学生が自主的にスポーツを求め、主体的に授業に取り組んでいけるように正課体育のカリキュラム編成体制を整備し、その具体的教育方法の改善につとめることが必要であろう。